第5課 許可

朴　この仏像、立派ですね。写真を撮ってもいいですか。

前田　いいえ、ここでは写真を撮ってはいけないことになっています。あそこに「撮影禁止」という立て札があるでしょう。

朴　残念ですが、仕方がありませんね。

朴　〈外に出て〉あの女の子、きれいな着物を着ていますね。写真を撮ってもいいでしょうか↘

前田　頼んでみましょう。

朴　〈子供の両親に〉すみません、お嬢さんの写真を撮らせていただきたいんですが……。

母　え、ちょっと……。

朴　私は中国の日本語教師です。着物の写真を生徒たちにぜひ見せたいんです。

父　ああ、そういうことですか。もちろん、かまいませんよ↗　どうぞ写してください。

朴　ありがとうございます。

考えてみましょう

①朴さんは、どのような「許可求め」をしていますか。「許可求め」の表現をすべて挙げてください。

②前田さんは朴さんの「許可求め」をどのように断っていますか。

③子供の両親は朴さんの「許可求め」をどのように受け入れていますか。

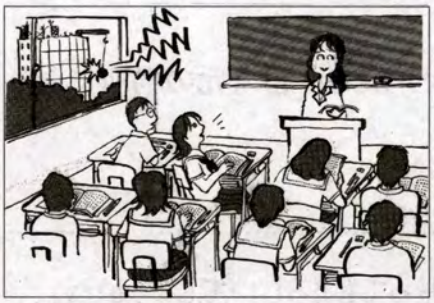
会話をしましょう

山口先生は日本語教師です。周さんは学生です。今日の授業では、作文を書く練習をします。

場面1：周さんはいい作文を書きたいので、家で書いて明日提出する「許可」を求めます。山口先生は、授業のねらいが短時間で作文を書くということなので、周さんの「許可求め」を拒否します。

場面2：周さんは努力しましたが、どうしても授業時間内に作文を書くことができませんでした。少し遅れて提出する「許可」を求めます。山口先生は、今日中に提出することを条件に出して、周さんの「許可求め」を受け入れます。

1…… 許可を求める時の表現


窓を閉めてもいいですか

この課では、他人に「許可を求める」時の表現、つまり「自分がしたいと考えていることを実際にしてもいいかどうか相手に聞く」時の表現を「許可求め」と呼ぶことにします。それに対して、相手に「してもいい」と許可する表現を「許可与え」、「してはいけない」と許可しない表現、つまり禁止したり拒否したりする表現を「断り」と呼ぶことにします。

～て(も)いいですか
～て(も)よろしいですか

「許可求め」の基本的な形は、「～て（も）いいですか」という形です。この形が最も一般的に使われます。目下の人に対してはもちろん、目上の人であっても、親しい人なら使えます。「～て（も）いいでしょうか↘」はそれよりもていねいな表現で、ほとんどの場面で使うことができます。家族や友人に対しては「～て（も）いい」を使います。

「～て（も）よろしいですか」「～て（も）よろしいでしょうか↘」は、それぞれ「～て（も）いいですか」「～て（も）いいでしょうか」よりていねいな表現です。目上の人や知らない人に対して使います。親しい関係の人、特に友人や目下の人に使うのはていねいすぎて不自然な感じがします。

●例１▶▶〈ゆかりが視聴覚教室（语音室）で自習しようと思って〉……

ゆかり　「先生、視聴覚教室の鍵をお借りしてもよろしいですか」

斎藤　「ええ。使い終わったら、必ず元の場所に返しておいてね↗」

●例２▶▶〈京都の古いお寺で〉……

直美　「ここで写真を撮ってもよろしいでしょうか↘」

住職　「フラッシュを使わなければ、撮ってもいいですよ↗」

●例３▶▶〈授業中に〉……

ゆかり　「先生、外がうるさいので、窓を閉めてもいいですか」

斎藤　「そうね。じゃ、お願いします」

●例４▶▶〈直美が大きなケーキを持って来た〉……

直美　「私が作ったケーキよ」

ゆかり　「へえ。すごいじゃない」

敏幸　「食べてもいい↗」

直美　「だめ。あとでみんなで食べるの」

～て(も)かまいませんか
～て(も)さしつかえありませんか

「～てもかまわない」「～てもさしつかえない」は、「そうしても困ることはない、都合の悪いことはない」という意味です。「～て(も) かまいませんか」「～て (も) さしつかえありませんか」という疑問の形で使う場合には、「もし、あなたが困らないのなら、私は～をしたい(のですが……)」という意味になります。

「かまわない」「さしつかえない」を使う表現は、「いい」「よい」を使う表現より少していねいな感じがするという人もいます。しかし、実際には、次の組み合わせは、それぞれ同じように使われています。

①「～て (も) かまいませんか」と「～て (も) いいですか」

②「～て (も) かまわないでしょうか↘」と「～て (も) いいでしょうか↘」

③「～て (も) かまわない↗」と「～て (も) いい↗」

④「～て (も) さしつかえありませんか」「～て (も) さしつかえないでしょうか↘」と「～て (も) よろしいですか」「～て (も) よろしいでしょうか↘」

●例5 ▶▶〈電車の中が暑いので隣の人に〉……

乗客　「窓を開けてもかまいませんか」

●例6 ▶▶〈会議の議題が書かれている黒板を指して〉……

「黒板を消してもかまわないでしょうか↘」

●例７▶▶〈友達に「今、話をする時間がありますか」という意味で〉……

「今、話してもかまわない⤴」

●例８▶▶〈写真屋にフィルムの現像を頼みに行って〉……

店員　「今、ちょっと込んでいるので、出来上がりが２時間後になってもさしつかえないでしょうか⤵」

ゆかり　「ええ、かまいません」

～ちゃいけない⤴
～ちゃだめ⤴

これらの表現は、「～て（も）いい⤴」と同じように家族や友人に対して使います。「～ちゃ」は「ては」の縮約形で、日常会話で使います。「では」の縮約形は「じゃ」となります。「～ちゃいけない⤴」「～ちゃだめ⤴」は、「私が～をしてはいけませんか」「私が～をしてはだめですか」という意味の「許可求め」です。少し幼稚な感じがする表現です。

●例９▶▶〈ゆかりは冷蔵庫にケーキがあるのを見つけて〉……

ゆかり　「このケーキ、食べちゃだめ⤴」

母　「いいよ⤴」

●例10▶▶〈魚釣りに行った川がとてもきれいだったので〉……

子　「この川で泳いじゃいけない⤴」

父　「水泳禁止って看板があるじゃないか⤵」

～(せ／させ)ていただきたいんですが……

この表現は、許可をもらうのが難しい場面でよく使います。文末を曖昧にすることで、遠慮がちな態度が示せます。

●例 11 ▶▶〈昭一は午前中ずっと寒気〔さむけ/发冷〕がしていて〉……

昭一　「先生、午後の授業を休ませていただきたいんですが……」

斎藤　「どうしたの↗」

昭一　「どうも熱があるようで……」

斎藤　「じゃあ、今日はもう家へ帰っていいですよ↗」

●例 12 ▶▶〈職員会議の前に〉……

校長　「では、会議を始めてよろしいですか。今日は議題が多いので、会議が少し長くなると思いますが……」

斎藤　「すみません。2 時から中国語教師研究会があるので、途中で退席させていただきたいんですが……」

☞　この構文は、「せる／させる」という使役の表現に「～ていただく」というやりもらいの表現が続き、さらに「～たい」という希望の表現が続いているので、かなり複雑です。

まず、日本語では「あなたが許可して、私がこうする」という直接的な表現より、「あなたが許可して、私にこのように行動させる」という使役の表現を使うほうがていねいになります。

①（私が）休みます→（先生が私を）休ませます

次に、「くれる」を「もらう」に替えて、主語を転換してみましょう。

②（先生が私を）休ませてくれる→（私が先生に）休ませてもらう

さらに「もらう」を謙譲語の「いただく」に替えて、よりていねいな表現にしてみましょう。

③（私が先生に）休ませてもらう→（私が先生に）休ませていただく

最後に希望を表す「～たい」を続けます。

④（私が先生に）休ませていただく→（私が先生に）休ませていただきたい

このようにして作られた「休ませていただきたい」「退席させていただきたい」という表現は、「休みたい」「退席したい」という表現よりずっとていねいです。また、最後の希望の表現「～たい」の代わりに「～てもよろしいでしょうか↘」を使うこともあります。この場合、「～させていただいてもよろしいでしょうか↘」という非常にていねいな「許可求め」になります。

(動作性)名詞＋をお許しいただけないでしょうか↘

(動作性)名詞＋の許可をいただきたいのですが……

あらたまった場面や公式の場面では、これらの表現が使われることがあります。しかし、日常会話で使うと不自然な感じがします。

●例 13 ▶▶〈恋人の両親の前で〉……

「お嬢さんとの結婚をお許しいただけないでしょうか↘」

●例 14 ▶▶〈教師が校長に許可をもらう〉……

「夏休みの教師研修会受講の許可をいただきたいのですが……」

2……「許可求め」の切り出し

すみません(が)、～

さしつかえなければ、～

「許可求め」を切り出す表現で最も多く使うのは、「すみません（が）」です。このほかに、「さしつかえなければ」という切り出しの表現があります。これは、あらたまった場面で「～たいんですが……」といっしょに使うことが多いです。

●例 1 ▶▶〈宿題の提出日に〉……

直美　「先生、すみません、明日出してもよろしいでしょうか↘」

工藤　「だめです。できていない人は、放課後残ってやってください」

●例 2 ▶▶〈山田先生は急に体の具合が悪くなって〉……

山田　「校長先生、さしつかえなければ、今日は早めに帰らせていただきたいんですが……」

校長　「わかりました。どうぞお大事に」

3……「許可求め」に対する返答

「許可求め」に対して許可をする場合、つまり「許可与え」の場合に気をつけなければならないのは、「許可求め」の文をそのまま使うと失礼になる場合があることです。例えば、「～てもいいですか」という「許可求め」の表現は普通に使われますが、これに対して、「～てもいいです」という表現を「許可与え」に使える場合は非常に限られます。

(1) 受け入れる場合

どうぞ(～てください)

「許可与え」の基本的なこたえ方は、「どうぞ(～てください)」です。一般的には「～てください」が付かない「どうぞ」だけの返事がよく使われます。短い表現ですが、笑顔で「どうぞ」と言えば、どんな場面で使っても失礼ではありません。反対に「どうぞ(～てください)」とていねいにこたえても、厳しい顔で言うと失礼な印象を与えてしまいます。重要なのは表情です。

よりていねいな表現として、「どうぞ、お～ください」「どうぞ、ご～ください」というこたえ方があります(例3)。「お～ください」の「～」の部分には和語が入ります。「ご～ください」の「～」の部分には動詞性の漢語名詞が入ります。また、言葉で「許可与え」をするより、実際の行動で示したほうがより積極的な「許可与え」となり、「ていねいな表現」になることもあります(例4)。

●例1 ▶▶〈ゆかりは風邪で気分が悪くなって〉……

ゆかり　「先生、早退〔そうたい〕してもいいでしょうか↘」

斎藤　「どうぞ。お大事に」

●例2 ▶▶〈会議中に来客があって〉……

山田　「校長先生、退席させていただいてもよろしいでしょうか↘」

校長　「どうぞ」

●例3 ▶▶〈デパートできれいな服を見つけて〉……

ゆかり　「ちょっとこの服、試着〔しちゃく〕してみてもいいですか」

店員　「はい、どうぞ、お試しください」

●例4 ▶▶〈職員会議中に〉……

校長　「ちょっと暑いですね。窓を開けてもいいですか」

高橋　「あ、私が開けます」〈窓を開けに行く〉

もちろん

(もちろん)いいよ

家族や友人からの「許可求め」である「～て(も)いい↗」には「もちろん」や「いいよ↗」というこたえ方をします。

「もちろん」のほうが積極的で、相手の行為を歓迎する気持ちが強い表現です。

●例5 ▶▶〈ゆかりと直美がいっしょに勉強していて〉

ゆかり 「消しゴム借りてもいい↗」

直美 「いいよ↗」

●例6 ▶▶〈陽子と誠が別れ際に〉

陽子 「今晩、電話してもいい↗」

誠 「もちろん」

～て(も)かまいません(よ↗)
けっこうです(よ↗)

「～て(も)かまいませんか」という「許可求め」の表現がありますが、「許可与え」にも「～て(も)かまいません」という表現があります。しかし、「～て(も)かまいませんか」は目上の人に対しても使えますが、「(～て)かまいません」は、目上の人に使うと失礼な場合があります。目上の人の「許可求め」に対しては、「どうぞ」を使うほうがいいでしょう。また、「けっこうです」というこたえ方も「かまいません」と同様、やはり、目上の人に対してはあまり使いません。

「かまいません」「けっこうです」の前に「ええ」「はい」といった言葉を付け加えると、快く承諾している印象を与えます。また、「かまいませんよ↗」「けっこうですよ↗」と、文末に「よ」という終助詞を付けることがありますが、主に目下の人に対して使います。

●例7 ▶▶〈京都の古いお寺で〉……

ゆかり　「ここで写真を撮ってもいいでしょうか↘」

住職　「はい。フラッシュを使わなければ、撮ってもかまいませんよ↗」

(～ても)いいです

「～てもいいです」という表現を「許可与え」に使う場面は、限られています。「～てもいいです」を「許可与え」に使うことができるのは、許可を与える権限や権威を持っている人がその立場から許可を与える場合です。例えば、医師が患者に対して、あるいは教師が生徒に対して許可を与えるような場合です。また、常識や法則、規則を説明する時にも「～てもいいです」が使えますが、それ以外の場面で使うと非常に失礼な表現になることが多いので、注意してください。したがって、「～て（も）いいです」という表現は一般的な「許可与え」には使えないと考えたほうがいいでしょう。

●例8 ▶▶〈これから小テストをすることになって〉……

敏幸　「先生、終わったら帰ってもいいですか」

工藤　「全部できたら、帰ってもいいですよ↗」

●例9 ▶▶〈予防接種が終わって〉……

昭一　「先生、お風呂に入ってもいいですか」

医師　「シャワーならいいです」

(2) 断る場合

許可を与える時は「どうぞ」とこたえればいいので簡単ですが、相手の「許可求め」を断る時には注意が必要です。「いいえ」「だめです」「いけません」などという、はっきりとした断りの表現は、非常に失礼な表現です。このような表現は、相手に好意を持っていない場合や、法律や規則で厳しく禁止されている場合以外は使いません。普通、「許可求め」を断る時は婉曲な表現で断ります。これらの表現は「依頼」の断り方と共通する表現が多いです。(【第４課「依頼」3. 依頼に対する返答】96～99頁参照)。

なお、「いい／よい」の反義語は「悪い」ですが、「～てもいいですか」という表現に対応する「～ては悪いです」という表現はありません。

すみません(＋断る理由)

普通、相手の「許可求め」を断る時は「すみません」「申し訳ありません」、相手が親しい人の場合は「ごめん(なさい)」というおわびの表現を使い、そのあとに断る理由を付け加えます。断る理由ははっきりと言い切らないほうがよりていねいな感じになります。言い切らないために「ちょっと……」という表現をよく使います。

●例 10 ▶▶〈ゆかりは中国語の勉強でわからないところがあって〉

ゆかり　「先生、質問があるんですが、昼休みに職員室におじゃましてもよろしいでしょうか↘」

斎藤　「ごめんなさい。昼休みはちょっと……。放課後なら、時間があるけど……」

依頼表現で断る場合

相手の「許可求め」に対して、その内容とは反対の事柄を「依頼」することによって、婉曲に断ることがあります。この場合も、「すみません」というおわびの言葉や断る理由を付け加えるのが普通です。

●例 11 ▶▶〈誠がアルバイト先の上司に〉……

誠　「明日、ちょっと用事があるので休んでもよろしいですか」

上司　「申し訳ないが、明日は忙しいから、来てもらえないかなあ」

●例 12 ▶▶〈朝、洗面所で〉……

妹　「お姉ちゃん、ドライヤー、使ってもいい↗」

姉　「悪いけど、急いでるから先に使わせてもらえない↗」

●例 13 ▶▶〈授業が終わって〉……

高橋　「黒板を消してもいいですか」

敏幸　「あ、先生、今写しているところなので、ちょっとそのままにしてくださいませんか」

～てはいけないことになっています
～ないでください／～てはいけません

「～てはいけないことになっています」とほぼ同じ意味の表現として、「～は禁止されているのです」があります。また、直接的な禁止の表現として、「～てはいけない／ちゃいけない」「～てはだめです／ちゃだめです」「～は許しません」「～は許可できません」などがあります。いずれも使われるのは次のような場合に限られます。

①法律や規則、規定、あるいは伝統や慣習で公的に禁止されていることを伝える場合

②許可を与える権限や権威を持っている人がその立場から許可を与えない場合（医師が患者に対して、あるいは教師が生徒に対して許可を与えない場合など）

これらの場合も「～てはいけません」という直接的な表現よりも、「～てはいけないことになっています」という表現のほうが多く使われます。「ことになっている」という表現は、「私が禁止しているのではなく、法律や規則あるいは伝統や慣習が禁止している」という意味です。

ただし、怒りや憤〔いきどお〕りの感情がある時は、これらの表現を私的、つまり個人的な日常会話で使うこともあります（例22）。また、家族やごく親しい友人に対してだけは、「だめ／だめ（だ）よ」のような直接的な禁止の表現が使えます（例23、24）。

●例 14 ▶▶〈飛行機の中で携帯電話を使おうとしている乗客に〉……

客室乗務員　「お客様、機内では携帯電話を使ってはいけないことになっております」

●例 15 ▶▶〈美術館で〉……

見学者　「ここで写真を撮ってもいいですか」

館員　「申し訳ありません。館内では写真撮影が禁止されているんです」

●例 16 ▶▶〈たばこを吸おうとしている子供を見つけて〉……

母　「たばこを吸っちゃだめです」

●例 17 ▶▶〈人が転んだのを見て笑った子供に〉……

父　「人の失敗を笑っちゃいけない」

●例 18 ▶▶〈何も言わないで休んだ生徒に〉……

教師　「無断で授業を欠席してはいけません」

●例 19 ▶▶〈生徒と自然公園にハイキングに行って〉……

教師　「ゴミを公園に捨てないでください。持って帰りましょう」

●例 20 ▶▶〈職員会議で〉……

校長　「この生徒の成績では、卒業を許可できません」

●例 21 ▶▶〈授業中〉……

教師　「授業中の私語〔しご〕は許しません」

●例 22 ▶▶〈ゆかりの父は大変厳しい〉

ゆかり 「今度の夏休みに友達と旅行に行ってもいい↗」
父 「子供だけの旅行は許さない」

●例 23 ▶▶〈テーブルの上のケーキを見て〉

姉 「ねえ、このケーキ、食べてもいい↗」
妹 「だめ」

●例 24 ▶▶〈妻が本を読もうとして〉

妻 「テレビ、消してもいい↗」
夫 「だめだよ。今おもしろいドラマが始まるところなんだから」

日本人は損をしている？

日本では古くから、物事を直接表現するより、すべてを言わずに、相手に察してもらう表現が好まれてきました。このテキストの中にも「言い切らずに文を終わるほうがていねいです」という説明が出てきます。また、相手の依頼や誘いを断る時に、その場ではっきり断りの言葉を言わないで、「ちょっと……」などとこたえるのもその一例です。

このような「あいまいな」表現は国際社会で誤解を招き、コミュニケーションの障害になっていると言う人もいます。自分の意見を聞かれた時に、はっきりとこたえることのできない日本人は国際社会の中で損をしているというのです。このような見方をする人は多いのですが、日本語には今でも「はっきり言い切らない」表現が数多くあり、また、直接的な表現を「失礼な表現」と感じる人も非常に多いのです。

また、あいづちのうち方も誤解を招きやすいと言われています。例えば、会話の中でよく「はい」「ええ」「そうですね」と言ったり、うなずいたりします。これは相手の言葉に対する賛成や承諾ではなく、「あなたの言葉を聞いていますよ」という合図にすぎません。これも国際社会でよく誤解を招きます。

ちなみに、このような合図を送り合うことに慣れている日本人は、電話で話す時にもその合図が聞こえてこないと相手が聞いているのかどうか不安になり、電話の途中でも「もしもし」と確認したりします。

会話例

〈場面 1〉

周　先生、すみませんが、家で書いてきますから、明日提出してもよろしいでしょうか↘

山口　どうしてですか。

周　なかなかうまく書けません。家で、時間をかけて、いい作文を書きたいんです。

山口　周さん、そんなに難く考える必要はありません。この授業は、なるべく短い時間で作文を書く練習ですから、家に持ち帰らないでください。

周　わかりました。

〈場面 2〉

周　先生、すみません。一生懸命書いたのですが、まだ最後まで書き終わっていません。もう少し時間をいただきたいんですが……。

山口　いいですよ↗　でも、今日中に書き上げて、提出してください。

周　はい、わかりました。今日のお昼までに必ず提出します。

山口　頑張ってください。

周　はい。ありがとうございます。

第3章　コミュニケーション重視の授業

第1章と第2章で取り上げたさまざまな表現を生徒が適切に使えるようにするには、教師はどのように指導すればいいのでしょうか。

この章では、教室活動で教師と生徒が使う表現、生徒のコミュニケーション能力を養成するための会話練習の作り方と進め方を具体例を挙げながら解説しています。

第1課 教室用語

李さん、問題1の答えを言ってください

授業中に教師と生徒がやりとりする時に使う言葉を「教室用語」と呼びます。ここでは日本の中高校で授業を進める時の表現を紹介しています。

「教室用語」といっても、中学1年生と高校3年生ではやや違いますが、ここでは中学校でも高等学校でも使える表現を扱っています。

1 …… 呼びかけに使う表現

教師が生徒を呼ぶ時には、「伊藤さん」「佐藤さん」というように「姓＋さん」という形で呼びかけるのが一般的です。男子生徒には「伊藤くん」「佐藤くん」というように「姓＋くん」と呼びかけることもあります。

クラス全員や校内の生徒全員に呼びかける時は、「みなさん」「みんな」を使います。なお、日本では小学校の学生を「児童」、中学校と高等学校の学生を「生徒」、大学の学生を「学生」と言いますが、これらの言葉をそのまま呼びかけに使うことはありません。

生徒が教師に呼びかける時は、単に「先生」と呼ぶか、「斎藤先生」のように「姓＋先生」と呼びかけます。教師の性別や年齢に関係なく、すべてこの「先生」という敬称が使われます。また、日本では、教師という職業はかなり社会的地位が高い職業と考えられているので、教わる立場でなくても、相手が教師だとわかっている場合は「姓＋先生」と呼びかけます。

2……授業の始まりに使う表現

授業の始まりに教科書を開くよう指示する場合は、例1、2のような表現を使います。また、前回の授業で学習したことを確認したり、今日の授業で何をするかを生徒に伝えたりする場合は、例3～6のように言うことができます。

●例1▶▶　教師　「では、授業を始めます／始めましょう」

●例2▶▶　教師　「教科書を開いてください。今日は○○ページからですね／教科書の○○ページを開いてください」

●例3▶▶　教師　「○○さん。この前の授業では、どんなこと／何を勉強しましたか」

生徒　「先週は、場所を表す助詞『で』と『に』を勉強しました／先週は第4課の会話を練習しました」

●例4▶▶　教師　「今日は比較の文型を勉強します」

●例5▶▶　教師　「今日はロールプレイで第4課の文型の練習をします」

●例6▶▶　教師　「今日は第4課の練習問題をやってみましょう」

3 …… 授業中に使う表現

(1) 生徒に指示を与える場合

生徒への指示は「～てください」という文型を使うのが最も一般的です。朗読や会話練習の時など、「～てください」を使って指示します。ただし、「～てください」を教室の外で使う時には注意が必要です（【第2課「勧め」1. 勧める時の表現】55～58頁参照）。

また、「～なさい」という文型も使います。「～なさい」は、指示や命令を与える文型として教師が使うだけでなく、練習問題や試験問題の指示文にも使います。ただし、この「～なさい」は、教室以外の場面ではあまり使いません。日本語のルールの中に、「聞き手の行動を話し手が決定してはならない」というルールがあります（【序章】5頁参照）。人に何かを指示することは、聞き手の行動を話し手が決めることですから、日本語のルールに反します。そこで、この「～なさい」は目下の、しかも非常に親しい人にしか使うことができません。実際に「～なさい」を使えるのは、親が子供に向かって指示する時、教師が生徒に指示をする時に限られていると言ってもいいでしょう。したがって、「～なさい」は、教室の外ではあまり使わないほうがいいでしょう。

最近では教師が生徒に指示する時にも「～なさい」ではなく、「～てください」を使うことが多くなっています。しかし、生徒に強く注意したり、叱ったりする時には「～なさい」を使います（例14、15）。

なお、クラス全員に対して指示を与える時には、「～（てみ）ましょう」という表現も使います（例6、7）。

●例1▶▶　教師　「○○さん、問題1の答えを言ってください」

●例2▶▶　教師　「○○くん、前に出て、黒板に答えを書いてください」

●例3▶▶　教師　「黒板を見てください／見なさい」

●例4▶▶　教師　「ノートに書いてください／書きなさい」

●例5▶▶　教師　「練習1をやってください／やりなさい」

●例6▶▶　教師　「1番の問題をやってみましょう」

●例7▶▶　教師　「みんなで読んでみましょう」

●例8▶▶　教師　「私のあとについて、いっしょに読んでください」

●例9▶▶　教師　「私について、みんなで本文を読んでください」

●例10▶▶　教師　「○○さんがAさんの役、××さんがBさんの役になって、会話をしてください」

●例11▶▶　教師　「右側の列の人がA、左側の人がBの役になって、会話の練習をしてください」

●例12▶▶　教師　「15ページの本文を、各自〔かくじ〕で読んでみてください」

●例13▶▶　教師　「声を出して読んでください／黙読〔もくどく〕してください」

●例14▶▶　教師　「静かにしなさい／おしゃべりをやめなさい」

●例15▶▶　教師　「もっとまじめに勉強しなさい」

(2) 授業を進める場合

生徒を指名する時は、「はい、佐藤さん」「次は伊藤くん」のように「姓＋さん／くん」だけを言うのが普通です。原則として「佐藤さんでしょう」「伊藤くんです（ね）」のように「です」を付けることはしません。中国では同じ姓を持つ人が多いので、教室内にも同じ姓の生徒が複数いることが考えられます。その場合、「姓＋名（＋さん／くん）」と呼ぶ必要があるでしょう。授業中、生徒同士で呼びあう時も「姓＋さん／くん」を使います。

授業中、順番に生徒にこたえさせたり練習問題や課を進めたりする時には、「次の～」という言葉を使います。「また」や「それから」という言葉がありますが、「また」は授業を進行させる時に使うことはありません。「それから」は、答えがいくつもある時に「それからどういう答えがありますか」という意味で、「はい、それから？」と聞くことができます。

●例 16 ▶▶ 教師 「はい、次（の人／の問題）」〈誤：「はい、また」「はい、それから」〉

●例 17 ▶▶ 教師 「では、次の問題をやってみましょう」

●例 18 ▶▶ 教師 「次の人、こたえてください」

●例 19 ▶▶ 教師 「それでは、次の課に進みましょう」

●例 20 ▶▶ 教師 「陳さん、次の練習をやってください」

●例 21 ▶▶ 教師 「次の問題ができる人、手を挙げてください」

(3) 生徒のこたえに対して評価を与える場合

生徒のこたえが正しい時、教師は「はい、よくできました」「はい、そのとおりです」「はい、正解です」と言います。間違った時は、「ちょっと、違いますね。もう一度／もっとよく考えてください」と言って、生徒にもう一度考えさせます。文を上手に読んだり、会話練習がよくできたりした時は、「とても上手です」「よくできました」とほめます。反対にあまり上手でない時は「もう一度、やってください」「もう一度、練習しましょう」、あるいは「もっと、しっかり練習してください」と言います。

●例 22 ▶▶

教師　「では、次の問題をやってみましょう。じゃあ、伊藤さん」
伊藤　「はい、○○○○だと思います」
教師　「ちょっと違いますね」
伊藤　「あ、間違えました。○○○○です」
教師　「はい、よくできました。では、次の問題、山本さん」
山本　「はい、○○○○です」
教師　「はい、そのとおりです」

(4) 生徒の質問に返答する場合

授業の内容にわからないことがあって、生徒が教師に何かを尋ねることを「質問」といいます。「問題」とは言いません。

生徒の質問にすぐこたえられればいいのですが、授業中に時間がなくてこたえられなかったり、教師がはっきりとわからなかったりする場合は、「いい質問ですが、今は時間がないので、次回こたえます」「今ははっ

きりとわからないので、調べてきます」などと言うといいでしょう。

●例23 ▶▶ 生徒 「先生、質問していいですか」
教師 「はい、どうぞ」

●例24 ▶▶ 生徒 「先生、質問があるんですけど……」
教師 「はい、何ですか」

☞ 「質問（する）」は、わからないことや理由などを問うことです。一方、「問題」は（1）練習や訓練として答えを出させるための問い、（2）何かをするのに支障となり、解決しなければならないこと、という意味で使います。しかし、生徒が教師に「問題」を出すことは考えられません。したがって、「先生、問題があります」と言うと、授業の支障となる事柄がある、例えば、先生の教え方が良くない、黒板がよく見えないなどという意味になってしまいます。

(5) 生徒に問いかけたり確認したりする場合

生徒がきちんと理解したかどうかを確認する時の代表的な表現を挙げてみましょう。

●例25 ▶▶ 教師 「（みなさん、）わかりましたか」
生徒1 「はい、わかりました」
生徒2 「先生、まだよくわからないんですけど……」

●例26 ▶▶ 教師 「（みなさん、）いいですか」
生徒1 「はい」
生徒2 「先生、ちょっと……」

●例 27 ▶▶　教師　「この課について、何か質問はありませんか」
生徒 1　「大丈夫です」
生徒 2　「よくわかりました」
生徒 3　「先生、ちょっとわからないところがあるんですけど……」
生徒 4　「すみません、ここがよくわからないんですけど……」

●例 28 ▶▶　教師　「この文章の意味はわかりますか」
生徒 1　「わかります」
生徒 2　「あまりよくわからないんですけど……」
生徒 3　「ちょっと、よくわからないんですけど……」

●例 29 ▶▶　教師　「もう、黒板（の字）を消してもいいですか」
生徒 1　「はい」
生徒 2　「先生、すみません。ちょっと待ってください」

●例 30 ▶▶　教師　「黒板(の字)が見えますか」
生徒 1　「はい。大丈夫です」
生徒 2　「はい。見えます」
生徒 3　「先生、もう少し大きな字で書いていただけますか」
生徒 4　「ちょっと、見えないんですけど……」

4…… 授業の終わりに使う表現

(1) 宿題を出す場合

授業の終わりに宿題を出す場合、「～をやってきてください」「～をやってきなさい」というように、「～てくる＋ください／なさい」を使います。また、宿題を

出す時は宿題の内容を言うだけではなく、その宿題をいつまでにどうするのか、具体的な指示を出します。この場合、「～てもらいます」を使います。

●例1▶▶ 教師 「問題3と4を宿題にします。家でやってきてください。次の授業でノートを提出してもらいます」

●例2▶▶ 教師 「宿題として、第4課の新しい単語を覚えてきなさい。明日、小テストをします」

●例3▶▶ 教師 「今日の宿題は、○○という題で作文を書くことです。長さは400字以上。よく書けている作文は、水曜日の授業で、みんなの前で発表してもらいます」

(2) 終わりのあいさつ

授業の終わりには、例4～6のような授業の終わりを告げる表現を使います。また、予習や復習を促したり、宿題について言及したりする時は、例7、8のような表現を使います。

●例4▶▶ 教師 「それでは、今日の授業はこれで終わります」

●例5▶▶ 教師 「今日の勉強はここまでにしましょう」

●例6▶▶ 教師 「はい。今日はここまで」

●例7▶▶ 教師 「家でよく予習、復習してください」

●例8▶▶ 教師 「宿題を忘れないようにやって来てください」

第２課　コミュニケーション能力を高めるための会話練習

外国語学習の目標の一つは、その言語で相手とコミュニケーションを図ることです。コミュニケーションをすることによって、情報を得たり、友人と議論をしたり、仕事をしたりすることができます。このようなコミュニケーション能力を高めるには、現実に起こる可能性があるいろいろな場面を想定して会話練習をすることが必要です。この時、たとえ練習であっても、実際のコミュニケーション過程を重視した自然な会話であることが求められます。このことを無視すれば、会話練習は「会話の練習」ではなく、「会話文の練習」になってしまい、学習効果は半減してしまいます。

ここでは、コミュニケーションを重視した会話練習とはどのようなものなのかを具体的に紹介します。

1 …… コミュニケーションの三つの過程

私たちがふだん行っているコミュニケーションには、次に挙げる「インフォメーションギャップ」「選択」「フィードバック」の三つの過程があると考えられます。これらの過程を含んだ会話練習をすることによって、生徒のコミュニケーション能力を高めることができます。

(1) インフォメーションギャップ

「インフォメーション」は「情報」、「ギャップ」は「裂け目」「すきま」「隔たり」という意味です。話し手が持っている情報を聞き手が持っていない場合、また、話し手と聞き手のそれぞれが持っている情報が異なる場合、両者の間に情報の差異、隔たりができます。これがインフォメーションギャップです。会話は本来、話し手と聞き手の間のインフォメーションギャップを埋めるために行う情報のやりとりです。インフォメーションギャップがない時には、自然な会話は生まれません。

(2) 選択

話し手は、何をどのように相手に伝えるかを自由に選択することができます。これを「選択権」があるといいます。

実際の会話場面では、たいてい聞き手と話し手の役を交互に繰り返しながら会話を進めます。聞き手は、話し手の言葉を聞いている時、相手の発話意図を予測したり表情を観察したりします。そして、状況を総合的に判断し、自分が発話する時の態度や言葉を選択し、実行しているのです。その際、選択は自由なのですが、時間的な制約があります。即座に自らの言動を選択する能力が求められます。

(3) フィードバック

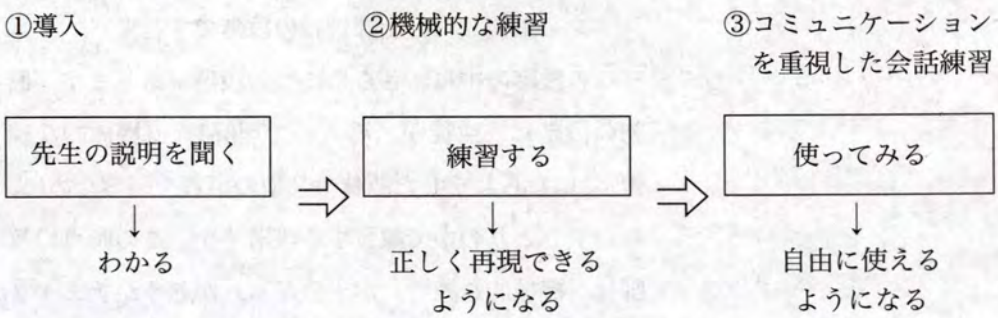
会話する時は、相手の発話を聞いて自分の意図がきちんと伝わっているかどうかを判断し、その判断をもとに次の自分の態度を決めます。このように相手の発話を次の自分の言動を決定するために考慮することを、「フィードバック〔反馈〕」といいます。実際の会話で

は、相互にフィードバックしながら会話を進めていきます。

2 コミュニケーションを重視した会話練習の教室活動での位置づけ

生徒は、図のような教室活動を通して日本語のコミュニケーション能力を身につけます。コミュニケーションの過程を含んだ会話練習は、このような教室活動の流れにおいて、教室活動の最終段階に位置する活動です。教師は、生徒の学習の段階を意識して指導にあたることが大切です。

〈教室活動の流れ〉



(1) 導入

教師は「学習項目」を提示し、語彙や表現が使用される場面、文法、機能などを説明します。

例えば、助詞「を」の使い方の説明と例文の提示、動詞の否定形の作り方や使い方の説明、「～てください」の機能の解説などを行います。

(2) 機械的な練習

学習項目の文型や語彙を文法的にも音声的にも正確に作って、再現できるように練習します。

機械的な練習には、例えば、教師のあとについて言わせる練習、動詞の「ます形」を「て形」に変える練習、語を入れ替えて文を作る練習、2文を1文にする練習、語を一つずつ増やしながら長文を作る練習などがあります。

(3) コミュニケーションを重視した会話練習

「導入」「機械的な練習」という教室活動は日本語を知識として身につける段階なので、生徒が日本語を使って実際にコミュニケーションをする活動は含まれていません。日本語のコミュニケーション能力を身につけるためには、教室の中で実際にコミュニケーション活動をすることが最も有効です。それが、「コミュニケーションを重視した会話練習」の段階です。

この段階の中に、さらに二つの段階があります。最初の段階は、生徒が「導入」で理解し、「機械的な練習」で口ならしをした語彙や文型の定着を図るために、短いやりとりの中で練習する段階です。この時点で教師は「機械的な練習」が十分だったかどうかチェックします。生徒の発音を聞いて、間違っていたら直します。

学習項目である語彙や文型が定着したら、次の段階です。あるひとまとまりの会話、つまり談話レベルでの日本語の運用力を養うために会話の「切り出し」「展開」「切り上げ」を総合的に練習させます。

3……コミュニケーション能力を高めるための会話練習とは

コミュニケーション能力を高めるには、どのような会話練習が必要か考えてみましょう。

例えば、同じクラスで毎日顔を合わせている２人の生徒に、次のような練習をさせるとします。

生徒１　「中国の方ですか」
生徒２　「はい、中国人です。
　　あなたも中国人ですか」
生徒１　「はい、私も中国人です」

生徒１と生徒２はお互いのことをよく知っているので、相手がどこの国の人かということを質問する必要はありません。つまり、インフォメーションギャップがなく、不自然な会話になってしまいます。インフォメーションギャップのない状況で行う「会話練習」にはコミュニケーションの過程が含まれていませんから、コミュニケーション能力を高めるための練習にはなりません。また、会話をする必然性がなければ、生徒は会話練習に興味が持てません。

では、次のような状況を教師が設定して、練習させたらどうでしょうか。

ここは東京の日中友好会館です。今日は日本人と中国人の交流パーティーが開かれます。参加者はみんな初対面です。李さんは中国人の友達を作りたいと思って参加しました。でも、中国人と日本人はとてもよく似ているので、聞いてみないと誰が中国人なのかわかりません。あなたは李

さんになって、中国人を探してください。

教師がこのような架空の場面と状況を設定し、生徒1に李さんを演じさせ、生徒2に交流パーティーに出席した初対面の人を演じさせます。生徒2には自分の演じる役の国籍を自由に選ばせ、生徒1には知らせません。そうすることによって、インフォメーションギャップが生まれます。また、「李さんがなぜ中国の友達を作りたいのか」を生徒に考えさせると、生徒の想像がふくらみます。例えば、「何年も中国に帰っていないので、中国語が話したくてたまらない」、「中国の最近の様子を聞きたい」など、いろいろな理由を想像することによって発話の動機をはっきりさせることができます。

生徒2が中国人を演じれば「はい、中国人です」とこたえ、日本人を演じれば「いいえ、私は日本人です」とこたえるでしょう。もちろん、ほかの国籍でもいいのです。もし、生徒2が中国人でなかったら、中国人に出会えるまで生徒1に探させてみましょう。そうすると、同じ文でも自然に何度も練習させることができます。

インフォメーションギャップが実際には存在しない場合、この例のように教師が架空の状況を設定したり、生徒ひとりひとりに異なる情報を与えたりするようにします。

もちろん実際にインフォメーションギャップがある場合は、それを大いに利用すべきです。例えば、初日の授業で生徒と初対面であれば、お互いに名前を知ら

ないというインフォメーションギャップがあります。いきなり名簿を読み上げたりしないで、「お名前は」と聞きましょう。生徒がそれにこたえることで、本物のコミュニケーションができます。

しかし、たいていの場合、同じクラスの生徒の間には、教師が求めるようなインフォメーションギャップがありません。そこで、教師はインフォメーションギャップの生まれるような状況や場面を設定することが必要になるのです。ある状況や場面を設定したら、会話の展開は生徒に任せてみましょう。そうすることで、生徒は選択権を持ち、相手とフィードバックしながら会話を進めることができます。

コミュニケーション能力を高めるためには、このようなコミュニケーション過程を含んだ会話練習が必要なのです。

4 コミュニケーションを重視したいろいろな会話練習の方法

ここでは、コミュニケーションを重視した会話練習のいろいろな方法を紹介します。第4章「機能別会話練習」を行う際に参考にしてください。

(1) 問答形式の練習

「コミュニケーションを重視した会話練習」の最も初歩の段階では、教師が設定した文脈の中で、生徒が学習項目の文型や語彙を使用して質問にこたえるという問答形式の練習を行います。まず初めに教師と生徒、それから生徒同士で練習させましょう。

次の例は、語彙や文型の定着を図るために実物を見せながら行う練習です。

●例1▶▶

〈い形容詞の練習例〉

教師　〈「長い」えんぴつを見せて〉「長いですか」
生徒　「はい、長いです」
教師　〈「短い」えんぴつを見せて〉「長いですか」
生徒　「いいえ、長くありません。短いです」

生徒は、教師がどんなえんぴつを目の前に出すのか、どんな質問をするか、目で確認し、耳で聞き、判断し、学習項目の知識を駆使して初めてこたえることができます。

例1のほかにも、「青いですか」と質問してから素早く黄色い紙を見せたり、青い紙を見せたりして、教師がテンポよく練習させると、生徒の集中力が高まります。いろいろな工夫をして、楽しい練習にしてください。

次のような「チェーンドリル」という練習もあります。「チェーンドリル」というのは「鎖のようにつながった練習」という意味です。質問と回答を順番にさせます。

●例2▶▶

〈チェーンドリル〉

教師　「Aさん、コーヒーが好きですか」
生徒A　「はい、好きです」
教師　「ああ、そうですか」

生徒Ａ　「Ｂさん、コーヒーが好きですか」
生徒Ｂ　「はい、好きです」〈コーヒーが好きな場合〉
生徒Ａ　「ああ、そうですか」

生徒Ｂ　「Ｃさん、コーヒーが好きですか」
生徒Ｃ　「いいえ、好きではありません」〈コーヒーが嫌いな場合〉
生徒Ｂ　「ああ、そうですか」

生徒Ｃ　「Ｄさん、お茶が好きですか」
生徒Ｄ　「はい、好きです」〈お茶が好きな場合〉
生徒Ｃ　「ああ、そうですか」

生徒Ｄ　「Ｅさん、コーラが好きですか」
生徒Ｅ　「いいえ、好きではありません」〈コーラが嫌いな場合〉
生徒Ｄ　「ああ、そうですか」

このような簡単な練習でも、質問する人とこたえる人の間には「インフォメーションギャップ」があり、質問された生徒は即座に判断し、返事を「選択」してこたえなければなりません。短いですが、「ああ、そうですか」と相手のこたえを確認する「フィードバック」もしています。つまり、これらの練習には、コミュニケーションが存在しているのです。

これらのほかにも、タスクシートを用意して、生徒にインタビュー形式で発話、応答、記入という作業をさせるという方法もあります。「タスク」とは「課題」です。 教師は生徒にタスクを与えて、その達成のために生徒が日本語を使わなければならないという状況を

作ります。「タスクシート」は、生徒が課題を記入する紙です。例えば、次のようなタスクシートを生徒に渡し、クラスメートに質問してそのこたえを記入するように指示します。記入するために質問し、相手はそれにこたえるという会話練習をすることになります。そして、記入した事項をあとで発表させます。

●例3 ▶▶

クラスメートに質問しましょう。⑤の質問は自由に考えてください。

質　問	クラスメート		
	さん	さん	さん
①好きな食べ物とその理由			
②嫌いな食べ物とその理由			
③好きなテレビ番組とその理由			
④好きな季節とその理由			
⑤			

以上のように、コミュニケーション過程を含む問答形式の練習を重ねるうちに、生徒は学習項目の語彙や文型が自然に使えるようになってくるでしょう。

(2) シナリオドラマ

会話場面の練習をするために、「ミニスキット〔短劇〕」を使用して、生徒に登場人物の役割を与え、演技をさせて練習することがあります。このような練習を「シナリオドラマ」と呼びます。「シナリオ」とは、映画やテレビドラマなどの脚本のことです。教室で使用するミニスキットも脚本と同じように場面、登場人物名、会話文のわかりやすく書かれているものを選びま

しょう。登場人物の感情について説明しているミニスキットを使うことが必要になる場合もあります。ミニスキットは、教科書の中の会話場面から借用してもいいし、教師が作成して与えてもいいでしょう。

また、実際に演じる生徒でペア〔2 人組〕やグループを作って、会話場面の全部あるいは一部分を相談させながら、ミニスキットを書かせる方法もあります。第 4 章「機能別会話練習」のロールプレイ課題を使用して、ロールプレイをさせる代わりにミニスキットを書かせてからシナリオドラマの練習をするといいでしょう。

「切り出し」「展開」「切り上げ」という談話の全過程の総合的な練習をする前段階には、このように会話場面や会話意図、会話文などをゆっくりと考えさせ、文字で表現させることも必要なことなのです。会話文を考える際に生徒は想像力を養うことができます。また、書く作業を通じて、すでに学習した語彙や表現の復習をすることができます。教師は生徒の表記の間違いから音声では聞きのがしていたような問題点に気づくことも多いでしょう。この機会に指導しましょう。

演技を付けて発表させるシナリオドラマ練習は、日本語でコミュニケーションをする時のしぐさや身ぶりについて考えさせるためにも効果的な会話練習です（【6. 会話練習を指導する時の留意点（1）～（3）】152、153 頁参照）。

●例4 ▶▶

〈東北出身の生徒が、餃子を作って日本人の日本語教師に勧める〉

生徒　「先生、これは中国の餃子です。どうぞ、たくさん召し上がってください」

先生　「じゃ、いただきます」

「やっぱり、中国の餃子はおいしいですね」

このような場面の練習では、「どうぞ」のところで手を添えたり、「いただきます」のあとで味わう時間をとってから「おいしい」と発話させたりすることが非常に大切です。このようなことが実際の場面を想定させ、実用にかなった日本語のコミュニケーション能力を高めることにつながるからです。

以上のようなシナリオドラマの練習は、会話文があらかじめ決められている練習なので、コミュニケーションの過程である「インフォメーションギャップ」「選択」「フィードバック」は含まれていません。教師は指導する時に、「会話文を読む練習」にならないよう気をつけなければなりません。会話練習は、「話す」練習です。

(3) コミュニケーションゲーム

教師は、インフォメーションギャップをカードやタスクシートによって作り出し、生徒が日本語を使ってコミュニケーションをしないとゲームができないという状況を設定します。ルールを決めて勝敗を競わせましょう。コミュニケーションゲームは、ゲームを行うことによって自然に練習ができる楽しい教室活動です。(例：第4章「機能別会話練習」第1課課題5、第4課課題2)

例えば、少しずつ違う箇所のあるよく似た絵を配り、その絵の相違点をどのチームが一番早く見つけられるか競うゲームをしてみましょう。

まず、クラスをいくつかのチームに分け、さらにそのチームを二つのグループに分けます。「お互いに見せ合ってはいけません」と言ってから、グループに１枚ずつ、つまり１チームに２枚ずつよく似た絵を配ります。「今、配った絵はよく似ていますが、違うところがあります。絵を見せ合わずに日本語で絵について話し合ってください。早く全ての違いを発見したチームが勝ちです。さあ、始めてください」と指示します。配った絵には、例えば、時計の示している時刻が違っていたり、テーブルの上のみかんの数が違っていたり、天気が違っていたりというように、あらかじめインフォメーションギャップを作っておきます。生徒は、「今何時ですか」「テーブルの上にみかんがありますか。みかんはいくつありますか」「雪が降っていますか」などの質問とその返答を繰り返すことを通じて間違い探しをします。 ほかのチームに勝つためには、必死でインフォメーションギャップを埋めるために活動します。相手の返答によって、「フィードバック」し、間違いを見つけることができます。

このようなコミュニケーションゲームをすると、生徒はゲームの勝ち負けに気をとられ、肝心の会話練習をおろそかにしがちです。この例では、カードの絵を見たままで相手に顔を向けずに会話したり、文法や発音が不正確になったりすることがあります。しかし、

あまり細かく発音や文法を直すと、ゲームの楽しさが損なわれます。このような時は、日本語を使ってコミュニケーションがとれていれば、多少は間違ってもいいことにします。ゲームが終了してから、間違いを指摘して正しい言い方を指導しましょう。

(4) ロールプレイ

ロールとは「役割」という意味です。ロールプレイとは「役割を演じること」です。授業にロールプレイを取り入れることで、生徒はいろいろな状況におけるコミュニケーションを擬似体験しながら日本語の学習ができます。ロールプレイでは、場面や状況、生徒が演じるロール、会話の目的などを教師が指示します。指示は口頭で与えることもできますが、役を演じる生徒に役割設定を書き込んだカードを渡して練習させることがあります。この紙のことを「ロールカード」といいます。このロールカードには、どんな役で、何をするかが書いてあります。ほかの生徒の役割は書いてありません。生徒は役割によって異なる情報を持っているので、ここに「インフォメーションギャップ」が生じます。

実際にロールプレイの例を紹介しましょう。

●例５▶▶

〈ロールカード１　班長〉

今度、学校で文化祭があります。クラスで出し物〔節目〕を一つ決めなければなりません。あなたは日本語の歌を歌ったらいいと思っています。あなたは班長になって、学習委員とクラスの出し物の相談をします。なるべく友好的に自分の考えを通したいと思います。

〈ロールカード２　学習委員〉

今度、学校で文化祭があります。クラスで出し物〔節目〕を一つ決めなければなりません。あなたはダンスをしたらいいと思っています。あなたは学習委員になって、班長とクラスの出し物の相談をします。なごやかに相談したいと思っています。

この例では、班長と学習委員は学校の文化祭の出し物〔節目〕に関して異なる意見を持っています。これがインフォメーションギャップになります。また、「日本語の歌」か「ダンス」か、どちらか一つ選ばなければならないので、その意見の違いを調整する必要があります。したがって、２人の間で会話を行う必然性が出てきます。ロールプレイをさせる前に、班長と学習委員の性別、相談する場所や時間を演じる生徒に想定させましょう。ここでは出し物の案を「日本語の歌」「ダンス」と設定していますが、「学習委員／班長と異なる意見を持つ」という条件にして、生徒に出し物を決めさせてもいいでしょう。生徒には、会話の切り出し、展開、切り上げについて選択権を与えます。

〈ロールカード１〉を手にした生徒は「班長」の役で

す。「文化祭の出し物について学習委員と相談する」という場面で、「日本語の歌を歌うという自分の意見を実現させる」という目的を持っています。会話が進むにつれ、目的達成のためには、自分と異なる意見を持っている学習委員を説得しなければならないことがわかってくるでしょう。説得する方法は自由に選択できます。例えば、学習委員の好きな歌を説得のために利用してもいいでしょう。その歌のCDを持っているから貸してもいいと「申し出る」こともできます。「ダンスをするなら私は文化祭に参加しません」とか「ほかのクラスメートもダンスをしたくないと言っている」などと強い態度を示すこともできます。

このように、教師が「インフォメーションギャップ」のある状況を設定し、生徒はその設定にもとづいてロールプレイをする中で、相手の反応を見て「選択」と「フィードバック」を繰り返しながら会話を展開していくのです。ロールプレイでは、コミュニケーションの三つの過程を会話練習に取り入れることによって、擬似的ではあっても、実際にコミュニケーションをとっているということができます。このようにして、生徒はコミュニケーションを擬似体験し、実践に強い日本語の運用能力を身につけることができるのです。

ロールプレイのいろいろ

ロールプレイには、会話場面をどのように設定し指示するかによって、いろいろな種類が考えられます。

①会話の成立する前提条件と会話の一部を設定し、未

設定の部分を生徒に自由に作らせるタイプ

どの部分を教師が設定し、どの部分を生徒に任せるかは、生徒の学習レベルによって決めます（例：第４章「機能別会話練習」第４課課題１）。

次の例は、会話の「切り出し」と「切り上げ」を設定し、会話の「展開」部分は生徒に自由に作らせるタイプです。生徒にこの会話の始めと終わりを読ませたら、すぐに役割を与えて、ロールプレイをさせます。

●例６▶▶

〈担任の高橋先生は先週から盲腸炎で入院している。休み時間に教室で〉

ゆかり　「今日、学校の帰りに高橋先生のお見舞いに行かないノ」
直美　「今日ノ　今日はちょっと（　　）」
ゆかり　「（　　）」
直美　「（　　）」
・
・
・
ゆかり　「じゃ、あさってね」
直美　「うん。じゃ、あさって」

---

②会話の成立する前提条件や場面、使用する表現を設定し、会話の主な部分を生徒に任せるタイプ

教師は、生徒の学習レベルに応じて、場面や状況、人間関係、目的、使用文型や使用語彙を設定します。常に生徒の学習レベルを考えて状況設定を行いましょう。学習レベルの進んだ段階では、どんな文型や語彙を使うのかを生徒に任せたり、複雑な状況を設定し、より複雑な目的に変えて挑戦させるといいでしょう

(例：第4章「機能別会話練習」第1課課題1～4、第2課課題1～2、第3課課題1～3、第5課課題3、第6課課題)。

次のように、場面だけを設定し、人間関係や目的の設定を全て生徒に任せることもできます。

●例7▶▶

2年間みなさんの日本語の先生だった田中先生が、日本に帰ることになりました。

教師自らこの「日本人の先生」の役をしてみましょう。生徒にはこのクラスの生徒の役をさせます。以下のような話題が予想されますので、教師はあらかじめ使用する表現や語彙を予測して準備しておきましょう。先生とお別れするにあたって、どのような見送り方をしたらいいのか。先生へのお別れの言葉はどう言ったらいいのか。手紙を書いたほうがいいのか。記念品を贈る場合、日本人の先生が喜んでくれそうなものはどんなものなのか。

これらの話題について、生徒に日本語で話し合わせます。また、日本人の先生との会話では敬語の練習もさせましょう。

このように生徒にとって身近な場面を設定するだけでも、以上のようなさまざまな話題で日本語を使用した教室活動ができるはずです。

③ロールプレイの途中で指示を与えるタイプ

ロールプレイを開始する際に生徒に状況設定を与え、ロールプレイの途中で指示を出す方法があります(例：

第4章「機能別会話練習」第5課課題1～2)。ロールプレイの途中で、「理由を聞く」「断る」「次の約束をする」「話を切り上げる」などの指示を書いたカードを生徒に示します。感情を指示する場合には、表情を描いた絵カードでもいいでしょう。生徒は、教師の示したカードの指示に従って、次の行動に移ります。とっさの判断力、臨機応変の言語運用能力が試されます。

ロールプレイを作る時の留意点

①生徒の持っている知識でできる練習を考えましょう

生徒にロールプレイをさせる時には、必要とする語彙や表現、文型を教師がすでに教えていることが前提となります。場面や状況を設定する時には、それに伴う文化的背景も含めて、生徒が持っている知識で演じられるかどうかを考えて設定しなければなりません。

教科書に出てきた文型を使うよう指示し、次のような短いロールプレイをさせるところから始めるといいでしょう。

●例8▶▶

教師　「李さんと張さんは、今日初めて会いました。李さん、張さんにあいさつしてください。張さんは、こたえてください」

(使用する表現：はじめまして／どうぞよろしく／～です／～から来ました、など)

●例9▶▶

教師　「李さんは消しゴムを持っていません。張さんは持っています。李さん、張さんに消しゴムを借りてください。張さんは、こたえてください」
(使用する表現：～て（ください）／どうぞ、など)

ロールプレイの指示を口頭で与える場合、簡単な日本語で指示できる時はできるだけ日本語で行うといいでしょう。それは、教師の指示を理解して活動を行うこと、それ自体が、日本語を使った教室内の教師と生徒の本物のコミュニケーションだからです。しかし、複雑な指示の場合には生徒の母語で与えたほうがいいでしょう。生徒が何をしたらいいのかがわかるように明確な指示を出すことが一番大切なのです。

②生徒の想像力を刺激する場面設定をしましょう

もし、中学生や高校生にビジネスマンの商談のロールプレイをさせたら、どうなるでしょう。生徒は、場面や状況にとまどってしまい、どのような日本語を使ったらいいのか想像がつかないでしょう。たぶん母語でもロールプレイをするのが難しいのではないでしょうか。ロールプレイは想像力によって成り立つ擬似体験です。したがって、生徒が想像しやすいように、なるべく生徒にとって身近な状況を設定するほうがいいのです。もし、既成のロールプレイの状況設定が生徒にとって現実味の薄いものである場合は、生徒が演じやすいように、性別や年齢、場所、職業などを変えてみましょう。

しかし、その一方で、自分と違う性別や年齢、さまざまな職業の人を演じて、いろいろ想像しながら日本語で活動できるのがロールプレイの楽しいところでもあります。時には想像の世界で演技する楽しみを味わわせてもいいでしょう。

いずれの場合も、いつ、どこで、どんな立場の人を相手に、どんな状況で、どんな目的で会話をするのか、生徒によく考えさせましょう。想像力を働かせることにより、実際のコミュニケーションの場で遭遇するいろいろな状況にすばやく的確に対応する力を養うことができます。

4 技能を伸ばす相乗効果のある設定をしましょう

「読む」「書く」「聞く」「話す」の４技能を、文字を使用するか、音声を使用するかという観点で分けると「読む・書く」と「聞く・話す」に分けられます。また、外の情報を取り入れるか、自分から外に発信するかという観点で分けると「読む・聞く」と「書く・話す」に分けられます。これら四つの技能はそれぞれ密接に関連しています。

会話練習は、「聞く・話す」活動はもちろんですが、ロールカードなどに書かれた情報を「読む」活動もあります。時には、タスクカードに相手から聞いた情報を「書く」必要もあるでしょう。コミュニケーションを重視した会話練習は、教師の設定の仕方いかんによって、四つの技能をすべて使った総合的な学習ができるのです。そのことを意識して、教室活動の中に取り入れてください。

5 会話練習を指導する時の留意点

会話力を上達させるためには、会話文を読ませたり、覚えさせたり、テープや教師の日本語を聞いて反復練習させたり、生徒同士で練習させたりするなど、いろいろな教室活動を行います。このような会話練習を指導する時には、以下のようなことに気をつけなければなりません。

(1) 相手の顔を見て練習させましょう

生徒に教科書の会話文の会話をさせると、①のように教科書を見ながらの発表になってしまうことがあるのではないでしょうか。この生徒たちは会話の練習をしているのではなく、会話文とその発音の練習をしているにすぎません。

私たちは読んだり書いたりする時だけでなく、聞いたり話したりする活動でも目をよく使っています。外国語で電話をかけるのが難しいと言われるのは、目の機能が使えないためです。つまり、私たちは会話をする時には、相手をよく見て、情報を得たり伝えたりしているのです。会話練習をさせる時には、会話する相手の言葉をよく聞くだけでなく、②のように相手に顔を向けるよう指導することが必要です。

(2) 身ぶり、しぐさも練習させましょう

③を見てください。ほめられた左の女性が顔を少し赤くして反応しています。練習の時にはこのような身ぶり、しぐさ、視線などの演技指導もするといいでしょう。実際の会話場面では、このような言語以外のコミュニケーションが大切です。

(3)「あいづち」の練習もさせましょう

上手に「話す」ためには、まず相手の言葉をよく「聞く」練習をすることです。発言が長ければ、途中で「聞いていますよ」ということを伝えるために、首を縦に軽く振ってうなずいたり、「はい」「うん」「そうですねえ」「そうですか」などの「あいづち」をうったりしましょう。内容によっては、「へえ」と驚いたり、「ふうん」と感心したりします。

あいづちはイントネーションによって感情がよく表れますから、テープやビデオを参考にして適切なあいづちを研究してください。ビデオや映画などで生徒に日本人のしぐさを観察させてみるのもおもしろいでしょう。きっと、中国人と同じところも違うところもあるはずです。気づいたことを話し合ってみましょう。

(4) 言葉の背景にある文化を理解させましょう

コミュニケーションを重視した会話練習をすると、生徒は次第に、実際に日本語を使用してコミュニケーションを行ういろいろ場面を想定できるようになってきます。そして、それぞれの場面でどんな日本語を使用したらいいのか、日本人ならどう反応するのだろうかなどと考えるようになります。生徒から「日本人だったら、こんな時どうするのだろう。どう言うのだろう」

といった疑問がわいてきたら、その機会をとらえて、教室内で話し合いましょう。そして、日本語の背景にある日本人の考え方や行動様式、つまり「文化」について考えさせましょう。正月の過ごし方や着物、茶道、相撲など「目に見える文化」について関心を持たせるだけでなく、日本人の考え方や行動様式のような「目に見えない文化」を理解させて初めて、生徒は日本語をコミュニケーションの道具として使用することができるのです。

(5) ロールプレイは生徒を中心に練習を進めましょう

ロールプレイは演劇や映画に似ています。教師が演出者〔導演〕になって、状況を設定し、生徒の配役〔角色〕を決めます。生徒は俳優〔演員〕になって、そこで役を演じるのです。ただし、ロールプレイが演劇や映画と違うのは、俳優、つまり生徒が「インフォメーションギャップ」と「選択権」を持ち、「フィードバック」しながら、自由に会話を展開できるというところです。

生徒がロールプレイをしている時は、教師は見守る助手役になります。会話の途中で文法や発音を細かく直さないほうがいいでしょう。その代わり、生徒が行き詰まった場合には助言を与えます。そして、ロールプレイ終了後に、クラス全体で重要な部分を復習します。この時、文法的な誤りを訂正し、適切な表現を提示し、さらに身ぶりや表情などの言語以外のコミュニケーションについても説明しましょう。録音や録画をしておくと、誤りの指摘や評価もよりわかりやすくなります。

評価は、生徒の誤りについては的確に行います。し

かし、生徒が次回のロールプレイを楽しみにできるよう、なるべくほめることを心がけましょう。ロールプレイは選択問題と違って、「正しい答え」があるわけではありません。少しぐらい間違いがあっても、コミュニケーションができるようになることが最大の目的なのです。日本語でコミュニケーションができて楽しかったという達成感が味わえるような活動をさせましょう。生徒がうまくできなくて恥ずかしいと思ったり、挫折感や苦手意識を感じたりするなど、ロールプレイに悪い印象を持ってしまうと、その後の学習がうまくいかなくなることがあります。決して生徒が学習意欲をなくすような評価はしないように心がけてください。

本来、ロールプレイは日本語を使って自由に個性的な自己表現ができるので、とても楽しい練習なのです。

(6) 教具や小道具を効果的に使用しましょう

円滑に教室活動を進め、学習効果を挙げるために教具や小道具を効果的に使用しましょう。

指示を与えるための教具として、「ロールカード」や指示を示すカードがあります。

また、生徒に会話練習の設定場面を想像しやすくするための小道具として、その場面の絵や写真、役割の名札などがあります。ちょっとした小道具で生徒はその役になることに楽しさを感じ、練習を進めることができるものです。例えば、「あなたは先生です」と口頭で指示しながら、「先生」と書いた名札を胸に付け、演じる役割が生徒にすぐにわかるようにします。受付の役なら受付と書いた札を机に置いたり、司会者の役の生徒にはマイクを持たせたりしましょう。また、場面

に応じてプレゼントの箱や花を持たせたりするなど、いろいろ考えられます。決して実物である必要はありません。小さな物でいいのです。工夫して小道具を効果的に使ってください。

(7)「ていねいな表現」と「くだけた表現」を使い分けられるように指導しましょう

初級の日本語教科書の文体は、基本的に「です/ます形」を使っています。「です／ます形」とは、「私は高校生です」「明日、学校へ行きます」のように、「です」「ます」で終わる文体です。否定の形は、「〜じゃありません」「〜ません」、過去の形は、「〜でした」「〜ました」です。「です／ます形」は「ていねいな表現」なので、初級レベルではどのような場面で使用しても大きな問題が生じることはありません。

しかし、「日本語のルール」（【序章】1〜8頁参照）にあるように、日本人は親しい友達に対しては「くだけた表現」を使うのが一般的です。例えば、「明日、学校へ行く？」と質問されたら、「うん、行く」とこたえます。このように、人間関係によって使用する表現が変化するのです。したがって、日本語で友人と複雑な話ができるくらいの学習レベルになっても、親しい友人に対して、「ていねいな表現」を使い続けていたら、「いつまでたっても打ち解けて話せない人」と思われてしまう恐れがあります。教師は、生徒の学習レベルに応じて、「ていねいな表現」と「くだけた表現」を少しずつ使い分けられるように指導するよう心がけましょう。生徒はこのような練習の経験を積み重ねることによって、自分を表現するコミュニケーションの道具として、自由に日本語が使えるようになるのです。

ロールプレイの学習効果

①生徒の文化理解が深まる

このテキストではロールプレイを会話練習の一つの方法として紹介していますが、ロールプレイは心理療法にも取り入れられています。人は自分以外のロールを演じることによって、他者の気持ちに気づいたり、他者のおかれている状況を理解したりできるようになります。こうしたロールプレイによる擬似体験は、異文化間の摩擦について考える時などにも効果的だといわれています。例えば、生徒に「ある中国人の役」と「ある日本人の役」を交互に演じさせることによって、文化が異なるために生じてくる摩擦や誤解を擬似体験させることができます。このような体験を通して、相手の考え方や気持ちはどうなのか、また摩擦に対してどのように対処すればいいのかを生徒に考えさせることができるのです。

②日本語が適切に使えるようになる

日本語の授業の中にロールプレイを取り入れることによって、日本人の人間関係や考え方などを含む「日本語のルール」（【序章】1～8頁参照）に対する理解を深めることができます。日本語のルールを理解したうえで、使用場面を想定したロールプレイをさせると日本語が適切に使えるようになります。つまり日本語の運用能力を高めることができるのです。

③さまざまな能力が開発される

ロールプレイでは、生徒はまず相手の言っていることを理解しようと想像力を働かせます。そして状況を判断し、自分の意見や考えを述べます。また相手と自分の考えが異なる場合には相手と交渉し、お互いの意見を調整しようとします。このようにして生徒の理解力、想像力、判断力、思考力、調整能力、自己表現力などの能力を伸ばすことができます。

④生徒主体の教室活動ができる

外国語の授業に限らず、授業でより大きな学習成果を挙げるには、生徒が自ら考え、行動し、体験できるような教室活動が必要です。本文でも述べたように、ロールプレイでの主役は生徒であって、教師は演出者です。したがって、ロールプレイを取り入れることで生徒主体の教室活動ができるのです。

⑤教室の人間関係がよくなる

ロールプレイは、日本語学習や異文化理解に役立つばかりでなく、副産物として、教室全体の雰囲気を明るくすることもできるでしょう。

以上、ロールプレイの効果を五つにまとめましたが、これらは外国語教育の目標そのものでもあります。外国語教育の目標は、ただ単に言葉を教えることだけではありません。生徒に、異なる文化が存在することに気づかせたり、異文化に関心を持たせたり、異なる文化の人びととの接し方を学ばせたりすることも外国語教育の大きな目標です。言葉は、「日本語のルール」のような文化背景を知って初めて適切に使えるようになります。

また、外国語教育を通して③で述べたようなさまざまな能力を高めることも重要です。これらの能力を高めることは、外国語だけでなく、母語を使用した時の理解力、分析力をも発達させ、言語運用能力を高めることにもなるからです。

第4章　機能別会話練習

この章では、第2章で解説した五つの機能を使って行う「コミュニケーションを重視した会話練習」として、ロールプレイとコミュニケーションゲームを紹介します。第1課から第5課に、それぞれ第2章の「誘い」「勧め」「申し出」「依頼」「許可」の機能に対応した練習、第6課に複数の機能を使用する応用練習の課題と、必要に応じて「指導の手順と留意点」、生徒が会話をする際に手助けになるような質問例（☺）を挙げています。

ロールプレイの指示には、口頭で与えるものとロールカードで与えるものがあります。ロールカードで与えるタイプは 🗗 で示しました。何も示していないものは、口頭で指示を与えるタイプです。

課題を与えるにあたっては、その課題の日本語使用場面について生徒の想像力を十分に刺激する必要があります。課題をさせる前や途中で必要に応じて、質問例（☺）を生徒に投げかけてください。

ロールプレイをしましょう

「課題」に登場する人物は、できるだけ第２章の例文と同じ設定にしています（【主な登場人物】ｘ頁参照）。「課題」の練習例はこの章の末尾にあります。教室で実際に練習をさせる際には、なるべく生徒と同じ性別の役を演じさせるよう、役の設定を適宜変えてください。

「コミュニケーションを重視した会話練習」は、生徒に日本語でコミュニケーション活動をさせることが目的です。練習する際、生徒はコミュニケーション活動の前提となる場面や役割を明確に理解しておく必要があります。十分に理解できていないと、生徒は、何をどのように練習したらいいのかわかりません。 したがって、練習の指示は、生徒が理解しやすいように、必要に応じて母語を使用してください。

ロールプレイの課題は、生徒のレベルに応じてシナリオドラマ練習として使用することができます。

第１課 「誘い」の会話練習

1 …… ロールプレイ

課題１ ……

ロールＡ：あなたは高校生です。明日は日曜日です。町の図書館で勉強しようと思っています。仲のいいクラスメートを誘ってください。
ロールＢ：あなたは高校生です。仲のいいクラスメートの誘いを、「断る」か「受ける」か決めてこたえてください。

【指導の手順と留意点】

「誘い」の表現を復習し使わせましょう。誘いを「受ける」場合と「断る」場合のこたえ方を考えさせます。

発展学習として、誘いを受ける場合には、待ち合わせの場所や時間などを相談させたり、断る場合には、別の約束をさせたりしてもいいでしょう。

☺ ロールＢ：「断る場合は、どんな理由で断りますか」

課題２ ……

ロールＡ：あなたは高校生です。仲のいい友達を夏休みの旅行に誘ってください。
ロールＢ：あなたは高校生です。仲のいい友達の誘いに対して、自由にこたえてください。

☺ 「どんな旅行ですか」「どこへ行きますか」「何日くらいの旅行ですか」「費用はどうしますか」「何を持って行きますか」「ほかに誰か行きますか」など。

課題3

ロールA:あなたは昭一です。あなたは今度の日曜日、映画を見に行きたいと思っています。敏幸くんを映画に誘って、会う約束をしてください。敏幸くんに別の予定がある時は、相談してください。

ロールB:あなたは敏幸です。あなたは今度の日曜日、買い物に行きたいと思っています。昭一くんを買い物に誘って、会う約束をしてください。昭一くんに別の予定がある時は、相談してください。

☺ ロールA:「どんな映画ですか」「敏幸くんは、この映画に興味がありますか」「映画館はどこにありますか」
ロールB:「何を買いに行くつもりですか」「どこへ行くつもりですか」「昭一くんは、その買い物に興味がありますか」

課題4

ロールA:あなたはゆかりです。社会科の高橋先生が入院しました。直美さんとお見舞いに行く予定です。クラスメートの昭一くんも誘ってください。待ち合わせの約束もしましょう。

ロールＢ：あなたは昭一です。ゆかりさんがあなたに高橋先生の入院について話しかけてきます。話の内容を詳しく聞いてから、あなたはどうするか考えてこたえてください。

☺ ロールＡ：「高橋先生はどんな病気ですか」「待ち合わせの場所はどこにしますか」「病院に何を持って行きますか」

ロールＢ：「高橋先生の入院のことを昭一は知っていましたか」

2…… コミュニケーションゲーム

課題５…… **〈予定表〉**

	午前 （午前８～12時）	午後 （午後１～５時）	夜 （午後６～９時）
日			
月			
火			
水			
木			
金			
土			

【指導の手順と留意点】 まず、上のような何も書いていない予定表を生徒全員に配ります。そして、自分の一週間の予定を考えさせて、表に書き込ませます。その時、空欄を六つ残すよう指示してください（例1）。次に、六つの空欄のうち三つに友達と一緒にしたい希望を書かせます（例２

では＊の項目)。残りの三つは空欄のまま、つまり予定のない状態にしておきます。それができたら、自分の希望が実現するようにクラスメートを誘って約束させます。誘われた人は、その時間に予定がなかったら約束を受けますが、その時間が空いていなかったり自分の希望と違ったりする時は断るように指示します。いちばん早く予定表を埋めることができた人が勝ちです。

予定表を作る時には、ほかの生徒と相談したり、ほかの生徒の予定表を見たりしないようにさせましょう。

〈例 1〉

午前 (午前 8 ～ 12 時)	午後 (午後 1 ～ 5 時)	夜 (午後 6 ～ 9 時)
授業	授業	図書館で勉強
授業	授業	
授業		
授業	授業	買い物
授業	授業	ピンポン
	昼寝	手紙を書く
テニス		

〈例 2〉

午前 (午前 8 ～ 12 時)	午後 (午後 1 ～ 5 時)	夜 (午後 6 ～ 9 時)
授業	授業	図書館で勉強
授業	授業	
授業		ピンポンがしたい*
授業	授業	買い物
授業	授業	ピンポン
読書がしたい*	昼寝	手紙を書く
テニス		映画が見たい*

第２課 「勧め」の会話練習

1 …… ロールプレイ

課題１ ……

1 ▶▶
ロールＡ：あなたは、中国の高校生です。家に来た日本人の友達といっしょに食事をしています。日本人の友達に料理を勧めてください。
ロールＢ：あなたは、日本人です。中国の高校生の友達にこたえてください。

2 ▶▶
ロールＡ：あなたは、中国の高校生です。家に来た日本人の先生といっしょに食事をしています。日本人の先生に料理を勧めてください。
ロールＢ：あなたは、日本人の先生です。中国の高校生にこたえてください。

【指導の手順と留意点】

１と２では、料理を勧める相手の設定が違います。このことによって、使用する表現が違うことに気づかせてください。

☺ ロールＡ：「あなたの家の料理はどんな料理ですか」「お客さんはたくさん食べていますか」「食べ方や作り方の説明ができますか」
ロールＢ：「料理の味はどうですか」

課題２

ロールＡ：工藤先生

今日は土曜日で、夕方から自宅でパーティーを開いています。高橋先生（男）も来ています。夜遅くなりましたから、家が遠い高橋先生に泊まっていくよう勧めてください。

ロールＢ：高橋先生

今日は土曜日で、夕方から工藤先生の家でパーティーが開かれています。夜遅くなったので、工藤先生が泊まっていくよう勧めてくれます。でも、明日は朝早くから用事があります。その理由を言っていねいに断ってください。

ロールＣ：高橋先生

今日は土曜日で、夕方から工藤先生の家でパーティーが開かれています。夜遅くなったので、工藤先生が泊まっていくよう勧めてくれます。工藤先生は先輩です。勧めをていねいに受けましょう。

【指導の手順と留意点】

生徒を２人１組のペアにして、１人にはロールＡのカードを、もう１人にはロールＢかＣのカードを渡します。そして、それぞれのカードに従って、ロールプレイをさせます。その時、相手が自分より先輩なのか、後輩なのかなど、人間関係に注意させます。

ペアではなく、３人でロールプレイさせることもできます。その時は、ロールＢとＣの人物が同じにならないように、名前を変えてください。

第３課 「申し出」の会話練習

1 ロールプレイ

課題１

ロールＡ：あなたは高校生です。ここは、あなたの学校の廊下です。向こうから先生が荷物をたくさん持って歩いて来ます。先生にあいさつしてから、荷物を持つと申し出ましょう。そのほかにもできることがあったら、先生の手伝いを申し出ましょう。
ロールＢ：あなたは先生です。廊下で生徒に会います。こたえてください。

☺ 「先生はいくつぐらいですか」「先生の担当教科は何ですか」
ロールＡ：「あなたは先生の教科が得意ですか。不得意ですか」「どうして先生の荷物を持ちたいと思ったのですか」
ロールＢ：「荷物は何でしょうか」「これからどこへ行くところですか」

課題２

ロールＡ：あなたは高校生です。放課後、教室に忘れ物をしたことに気づきました。教室に取りに行ったら、クラスメートが先生に頼まれた仕事をひとりでしていました。その仕事はとても大変そうです。手伝いたいと申し出ましょう。少なくとも二つ以上の申し出の表現を使ってください。
ロールＢ：あなたは高校生です。放課後、先生に頼まれた仕事をしています。クラスメートが来ます。こたえてください。

【指導の手順と留意点】　このように少し複雑な設定だと、ロールプレイをする前に、生徒同士の簡単な打ち合わせや考える時間が必要になるでしょう。このように、生徒が想像力を働かせて場面や状況の細部を創作する課題は、ロールプレイとしてだけでなくシナリオドラマ練習に使用するのにも適しています。クラスメートとペアにしてミニスキットを考えさせると、話の展開をおもしろく書く生徒もいるはずです。

☺　「クラスメートとはどんな関係ですか。仲はいいですか。クラブ活動や趣味は同じですか」
ロールＡ：「忘れ物は何ですか」
ロールＢ：「先生に頼まれた仕事は何ですか」「どんな手伝いができそうですか」

課題３

1 ▶▶
ロールＡ：あなたは中国の高校生です。あなたの町に日本人大学生の高崎さんが住んでいます。高崎さんは語学留学中ですが、まだ中国語がよくわかりません。あなたは、高崎さんに何か困ったことがあるかどうかを聞きます。高崎さんに困ったことがあれば手伝いたいと申し出ましょう。
ロールＢ：あなたは日本人大学生の高崎さんです。中国の高校生にこたえてください。

2 ▶▶
ロールＡ：あなたは中国の高校生です。あなたの学校に日本人の高崎先生がいます。高崎先生はまだ中国語がよくわかりません。あなたは、高崎先生に何か困ったことがあるかどうかを聞きます。高崎先生に困ったことがあれば手伝いたいと申し出ましょう。
ロールＢ：あなたは日本人の高崎先生です。中国の高校生にこたえてください。

【指導の手順と留意点】　１と２では、手伝いを申し出る相手の設定が違います。このことによって、使用する表現が違うことに気づかせてください。

☺　1 ▶▶
「2人は、どうして知り合いになったのですか」
ロールＡ:「高崎さんは何のために語学留学をしていると思いますか」「日本人が中国で生活していて困ることはどんなことだと思いますか」
ロールＢ:「申し出を断る場合は、どんな理由で断りますか」

2 ▶▶
ロールＡ：「高崎先生は何を教えていますか。どうして、中国で教師をしているのだと思いますか」「日本人が中国で生活していて困ることはどんなことだと思いますか」
ロールＢ:「申し出を断る場合は、どんな理由で断りますか」

第４課　「依頼」の会話練習

1 …… ロールプレイ

課題１ ……

ゆかりと敏幸は高校生です。ゆかりは、敏幸に数学の宿題を今日教えてもらいたいと思っています。敏幸は明日の試験に備えて、今日は勉強しなくてはなりません。

〈朝、登校途中の路上で〉
ゆかり：敏幸くん、数学が得意だったよね。数学の宿題があるんだけど、ちょっとわからなくて……。悪いけど（
　　）。
敏幸：今日はちょっと……。
・
・
・
ゆかり：わかった。

【指導の手順と留意点】　上の会話を完成させるようにロールプレイをさせます。

☺　ゆかり：「宿題の提出日はいつですか」「敏幸くんが快く引き受けてくれるように、いい依頼の方法を考えてください」
敏幸：「明日の試験はどんな試験ですか」「依頼を断る場合は、どういう理由で断りますか」
「依頼を受ける場合は、どういう気持ちで受けるのでしょうか。依頼を受けるため条件がありますか」

2…… コミュニケーションゲーム

〈持ち物カード例1〉

	○		×
	×		○
	○		○

〈持ち物カード例2〉

	×		○
	○		○
	○		×

【指導の手順と留意点】　これは、持っている物に○、持っていない物に×を付けた持ち物カードです。ここでは、2枚だけ例として挙げましたが、実際には持ち物カードは数種類用意

します。

×が付いている物をほかの生徒から借ります。全てを早く借りられた人が勝ち、というゲームです。「ほかの人に貸してしまった物は、また借りなければならない」というルールにするとゲームの決着まで長時間を要することになり、十分に練習させることができます。クラスの状況に合わせて時間制限を設けるなどのルールを設定してください。

持っていない物を借りるために、まず、生徒はほかの生徒に声をかけ、借りる理由を話してから貸してくれるよう依頼します。貸してほしいと頼まれた生徒は、持っている時は貸してあげましょう。持っていない時は、理由を言って婉曲に断ります。いずれの場合もお礼を言って会話を終了します。単に持っていない物を集めるだけでなく、会話の「切り出し」「展開」「切り上げ」がきちんとできたかどうかを評価してください。

このゲームは、自分の持っていない物を持っている人と早く出会えるかどうかという「運」がゲームの勝敗にかかわってきます。日本語の能力だけでは勝てないところがこのゲームのおもしろさでもあります。

カードに描く物の種類は自由に変えてください。

第５課　「許可」の会話練習

1……ロールプレイ

課題１……

ロールＡ：あなたは高校生です。食堂に来ました。とても込んでいます。空いている席を見つけたので、その隣にいる人に座ってもかまわないかどうか聞きましょう。先生から「指示カード」が示されますので、それに従ってロールプレイをしてください。

ロールＢ：あなたは食堂でご飯を食べています。食堂はとても込んでいますが、あなたの隣の席は空いています。高校生が来て、座ってもかまわないか聞いてきます。先生から「指示カード」が示されますので、それに従ってロールプレイをしてください。

【指導の手順と留意点】

生徒は、ロールカードを読んでロールプレイをします。教師は、適当なところで生徒に指示カードを見せてロールプレイの設定や展開を指示します。このロールプレイはとっさの判断力を養うことが目的の一つなので、必要以上に生徒に考える時間を与えないように、適当なところを見計らってすばやく指示カードを見せることが重要です。

〈場所を指示するカード〉

学校の食堂

街の食堂

〈ロールを指示するカード〉

ロールＡとロールＢは友達

ロールＢは年上の人で、ロールＡの知り合い

ロールＢは年上の人で、ロールＡの知らない人

〈ロールＢの応答を指示するカード〉

許可する／承諾する

断る

課題２

ロールＡ：あなたは高校生です。国際交流パーティーで日本人女性に会いました。その女性はとてもきれいな和服を着ています。あなたはその女性の写真を撮りたいです。撮ってもかまわないかどうか聞いてください。先生から「指示カード」が示されますので、それに従ってロールプレイをしてください。

ロールＢ：あなたは日本人女性です。国際交流パーティーに来ています。きれいな和服を着ています。中国人の高校生が来て、あなたの写真を撮ってもかまわないかと聞いてきます。先生から「指示カード」が示されますので、その指示に従ってロールプレイをしてください。

〈ロールを指示するカード〉

ロールＢは高校生

ロールＢは年上の人（50歳）

ロールＡとロールＢは友達／知り合い

ロールＡとロールＢは初対面

〈ロールＢの応答を指示するカード〉

許可する／承諾する

断る

課題３

ロールＡ：あなたは高校生です。先生に次の許可を求めてください。理由も言ってください。

窓を開ける

ロールＢ：あなたは高校生です。先生に次の許可を求めてください。理由も言ってください。
　友達を保健室〔医務室〕へ連れて行く

ロールＣ：あなたは高校生です。先生に次の許可を求めてください。理由も言ってください。
　今日提出締め切りの宿題を来週提出する

ロールＤ：あなたは高校生です。先生に次の許可を求めてください。理由も言ってください。
　早く家に帰る

ロールＥ：あなたは高校の教師です。生徒がいろいろな許可を求めてきます。その理由をきいてください。許可するかしないかは自由です。時には、厳しい教師になって、禁止表現で断ってもかまいません。

【指導の手順と留意点】

生徒にロールカードを１枚ずつひかせて、次から次に先生に許可を求める発言をさせましょう。こたえる教師役の生徒は、日常と逆の先生の立場になり楽しい経験ができます。うるさい生徒にユーモアを交えて応対するようにさせてください。

「『許可』を求める表現を使って、先生にいろいろな

許可を求めましょう」と指示して、許可の内容を生徒に考えさせてもいいでしょう。「トイレへ行ってもいいですか」「テストの時、辞書を使ってもいいですか」「来週のテストの問題を教えていただきたいんですが……」など日常考えていることをたくさん話させるいい機会になります。

第6課 応用練習

課題……

ロールA：ここは中国です。あなたは日本語を勉強している中国人の高校生、王です。日本から来たばかりの日本人留学生、水野さんとピンポンがしたいです。朝、学校へ行く途中で、水野さんに会いました。まず、あいさつをしてから、話を切り出し、誘いましょう。もし断られたら、失礼にならないように断りの理由を聞いてください。そして、理由がわかったら、障害となっている問題を解決するように申し出たり、親切にアドバイスをしたりしましょう。そして、もう一度誘ってみましょう。

ロールB：ここは中国です。あなたは日本人の高校生、水野です。日本から来たばかりの留学生です。朝、学校へ行く途中で、クラスメートの王さんに会いました。王さんは、日本語を勉強している中国の高校生です。あなたは、王さんと友達になりたいと思っています。まず、元気にあいさつをしましょう。王さんは、あなたをピンポンに誘います。でも、あまり気が進まないので断ります。あなたはピンポンがあまり上手ではありません。それにラケットを持っていないし、どこで買ったらいいかわかりません。ラケットが高かったら(30元以上)、買えません。以上が、ピンポンをすることについて気が進まない理由です。

王さんは、とても親切で、ピンポンができるようにいろいろとアドバイスをしてくれます。あなたはだんだんピンポンがしたくなってきます。お礼を言って、誘いを受けましょう。そのあと、2人でピンポンをする約束をしてください。

会話練習例と留意点

会話の練習問題に正解はありません。話し手と聞き手の関係、性別、年齢、場面、状況などの前提によって、会話の内容も、使う表現も変わってくるからです。ここでは、第４章「機能別会話練習」の練習例を紹介します。練習例では、話し手と聞き手の立場や関係などがよくわかるように、できるだけ第２章で取り上げた例文中の人物を登場させています。また、表現についてはできるだけ男性でも女性でも使えるものを紹介しています。男性と女性で言い方が違う場合は、男性の表現は で、女性の表現は で表しています。登場人物の名前、性別などは自由に変えてください。また、高校生同士の会話はここでは「日本語のルール」（【序章】１～８頁参照）に従って、くだけた言い方になっていますが、です／ます形で練習してもかまいません。

書き言葉と話し言葉は違います。実際の会話では「では→じゃ」「のです→んです」「てしまう→ちゃう」「けれど→けど」「しておく→しとく」「ている→てる」のような縮約形を使用することが多いので、会話例を生徒に紹介する際に留意して指導してください。

生徒同士の呼び方は、「姓＋さん／くん」「名＋ちゃん／さん／くん」の形を使うのが一般的です。そのほかには、「さん」も「くん」も付けないで呼び捨てにしたり、ニックネームで呼んだりといろいろあります。ここでは、「名＋さん／くん」「姓＋さん／くん」を使っています。

また、必要に応じて会話練習をさせる時の留意点を挙げてありますので、これらも参考にしてください。

第１課「誘い」の会話練習

課題１

〈受け入れる場合〉

直美　「ねえ、ゆかりさん、明日、図書館で勉強しないノ」

ゆかり　「いいね。家で勉強すると、すぐに眠くなるからね」（ ～眠くなるからな）

〈話を断る場合〉

昭一　「敏幸、明日、いっしょに図書館に行って勉強しないノ」

敏幸　「ごめん。明日はちょっと用事があるんだ」

課題２

ゆかり　「ねえ、昭一くん、夏休みに旅行に行かないノ」

昭一　「どこへ行くのノ」

ゆかり　「軽井沢〔かるいざわ〕。おじさんの別荘〔べっそう〕があるの」

昭一　「別荘か。すごいな」（ ～すごいね）

ゆかり　「軽井沢はとても涼しいし、テニスもできるし、食べ物もおいしいから行こうよ」

昭一　「ほかに誰が行くのノ」

ゆかり　「直美さんと敏幸くんも誘おうと思っているんだけど……」

昭一　「敏幸も行くんなら、ぼくも行こうかな」
ゆかり　「じゃ、決まり。8月上旬はどう♪」
昭一　「ぼくは大丈夫だよ♪」
ゆかり　「じゃ、詳しい日程は4人で相談しよう」
昭一　「軽井沢の別荘か。楽しみだな」
〈昭一は夢を見ているような表情をする〉
ゆかり　「昭一くん、聞いてるの♪」
【注】軽井沢は長野県にある有名な避暑地。

課題3

昭一　「ねえ、今度の日曜日、映画に行かない♪」
敏幸　「えっ、どんな映画♪」
昭一　「タイタニック〔泰坦尼克号〕っていうアメリカの映画。知らない♪」
敏幸　「ふうん。タイタニックね。今度の日曜日、KinKi Kids〔キンキキッズ／近几少子〕の新しいCDを買いに行こうと思ってるんだ」
昭一　「どこに行く♪」
敏幸　「新宿〔しんじゅく〕」
昭一　「その映画は新宿でもやってるから、まずいっしょに映画に行って、そのあとCDを買いに行こうよ」
敏幸　「それでもいいかな。じゃあ、何時にする♪」
昭一　「映画館が込まないうちに行こう」
敏幸　「そうだね。じゃ、9時はどう♪」
昭一　「いいよ♪」
敏幸　「じゃ、9時に新宿駅の西口で」
昭一　「うん」

課題4

ゆかり　「昭一くん、高橋先生が盲腸〔もうちょう〕で入院したんだって」
昭一　「えっ。本当♪」
ゆかり　「先週学校で急におなかが痛くなって、病院に運ばれて、そのまま入院したんだって。今はずいぶん元気になったんだって。お見舞いに行かない♪」
昭一　「うん、行く行く」
ゆかり　「直美さんと明日行く予定を立ててるんだけど……」
昭一　「いいよ♪」
ゆかり　「お見舞いに何か持っていく♪」
昭一　「盲腸だから食べ物以外のものにしよう」
ゆかり　「花はどう♪」
昭一　「花はちょっと……。マンガを持って行かない♪」
ゆかり　「マンガはいいかもしれないね。あっ、でも先生はおなかの手術をしたばかりだから、マンガを読んで笑うと、おなかが痛いんじゃない♪」
昭一　「なるほど。じゃ、どうする♪」
ゆかり　「まあ、私たちが行って、顔を見せるのがいちばんだと思うな」
昭一　「そうだね」
ゆかり　「じゃ、直美さんと待ち合わせの場所と時間を相談して、夜、電話するから」
昭一　「うん。じゃ、よろしく」
【注】「盲腸」は「盲腸炎」の略。
日本では普通、病院のお見舞いには鉢植えの花を持って行きません。鉢植えの花には根が付いているので、病人がベッドから起

き上がれなくなって、ベッドに「根（寝）付いてしまう」ことを連想するからです。また、お見舞いやプレゼントに、菊〔きく〕の花は普通贈りません。菊は仏壇や墓に供える時に使います。

課題５の留意点

あらかじめ教師が予定を記入した数種類のカードを用意しておいてもいいでしょう。人物の設定もカードに記載しておくと、目上の人を誘う時の練習をすることもできます。その際、実際に誘うはずもない相手との練習は不自然なので、配慮が必要です。例えば、高校生と会社の社長が「水曜日の夜、いっしょにピンポンをしていただけないでしょうか」「その日はちょっと……。会合があるんだ」というようなやりとりをするのは不自然です。どんな人間関係なのかが想像しにくいからです。学校の先生や先輩後輩の役を設定するのが適当でしょう。

第２課　「勧め」の会話練習

課題１

〈1　日本人の友達に勧める場合〉

中国の高校生（　）「どうぞ、餃子を食べて。白菜と豚肉を使ってるの」（　～を使ってるんだ）

友達　「おいしそう。いただきます。〈食べる動作〉やっぱり中国の餃子はおいしいね」

中国の高校生「このピーマン炒めも食べてみて」

友達　「うん、ありがとう」〈食べる動作〉

中国の高校生「もっと餃子を食べて」

友達　「ありがとう。でももうたくさん食べたから、おなかいっぱい。ごちそうさま」

〈2　日本人の教師に勧める場合〉

中国の高校生「先生、餃子をどうぞ。白菜と豚肉を使っているんです」

教師　「そうですか。じゃ、いただきます。〈食べる動作〉やっぱり中国の餃子はおいしいですね」

中国の高校生「先生、このピーマン炒めもどうぞ」

教師　「ありがとう。〈食べる動作〉どれもおいしいです」

中国の高校生「先生、もっと召し上がってください」

教師　「ありがとう。でも、もうたくさんいただきました。本当にごちそうさまでした」

課題２

〈勧めを断る場合〉

工藤　「もう、遅いから、よかったら泊まっていかないか」（　～泊まっていかないノ）

高橋　「ありがとうございます。でも、明日用事があって朝が早いんです。今日はこれで失礼します」

〈受ける場合〉

工藤　「もう、遅いから、よかったら泊まっていかないか」（　～泊まっていかないノ）

高橋　「あっ。もうこんな時間ですか。すみません。よろしいんですか」

工藤　「いいよ↗　遠慮しないで」
高橋　「では、お言葉に甘えさせていただきます」

第３課「申し出」の会話練習

課題１

敏幸　「先生、おはようございます」
斎藤　「おはよう、中山くん」
敏幸　「荷物をお持ちしましょう」
斎藤　「ありがとう。助かるわ」（ 助かるよ）
敏幸　「ずいぶん重いですね。何が入っているんですか」
斎藤　「みんなの作文が入っているんですよ。それとノートパソコンも」
敏幸　「そうですか。ぼくも最近パソコンをよく使っています」
斎藤　「そう。実は、初めてパソコンを買ったの。」（ 初めてパソコンを買ったんだ）「まだ使い方がよくわからなくて……」
敏幸　「先生、よかったら、ぼくが……」（ よかったら、私が……）
斎藤　「ありがとう。今度いろいろ教えて」
敏幸　「はい。いつでもおっしゃってください」

課題２

敏幸　「あれ、直美さん、どうしたの↗」
直美　「教科書を忘れちゃって……。敏幸くんこそここで何をしているの↗」
敏幸　「山田先生に頼まれた衛生週間の壁新聞を作っているんだ」（ ～を作っているの）
直美　「大変そう。私でよかったら、手伝おうか」
敏幸　「ありがとう。でも、ひとりでできるからいいよ」
直美　「そう。じゃ、ジュースでも買ってきてあげようか」
敏幸　「じゃ、たのもうかな」
〈敏幸がお金を渡そうとすると〉
直美　「いいよ、いいよ↘　何が飲みたい↗」
敏幸　「いいの↗　ありがとう。じゃ、ウーロン茶を買って来てくれる↗」
直美　「うん、わかった。」
〈しばらくして、直美がウーロン茶を２本持って帰って来る〉
直美　「買って来たよ」
敏幸　「早かったね」
直美　「はい、どうぞ」
敏幸　「ありがとう」
直美　「ねえ、本当に私にできることはない↗　例えば、色を塗るとか」
敏幸　「本当に大丈夫。ひとりでできるから」
直美　「そう。じゃ、頑張って。私（ ぼく）もう帰るからね」
敏幸　「うん。ウーロン茶、ごちそうさま」

課題３

〈1　高崎さんは大学の留学生〉

〈李さんは時々高崎さんのところに遊びに行くが、期末試験の間は行っていなかった〉
李（ ）「高崎さん、久しぶり」
高崎　「こんにちは。期末試験、終わった↗」
李　「うん。それで遊びに来たの。最近元気↗　何か困ったことない↗」
（ ～それで遊びに来たんだ。～）
高崎　「実は、銀行口座を作りたいんだけど、中国語がよくわからないか

ら、ひとりでできるかどうか不安で……」

李　「よかったら、いっしょに行こうか」

高崎　「ありがとう。でも、大丈夫。中国語の勉強になるから、ひとりでやってみる。できなかったら、そのときは助けて」

李　「うん。私（ぼく）にできることがあったら、いつでも言って♪」

高崎　「ありがとう」

〈2　高崎さんは日本語教師〉

〈張さんは時々高崎先生のところに遊びに行くが、期末試験の間は行っていなかった〉

張　「先生、お久しぶりです」

高崎　「張さん、こんにちは。期末試験、終わったんですか」

張　「はい。それで遊びに来ました。お元気ですか。何か困ったことはありませんか」

高崎　「実は、銀行口座を作りたいんですけど、中国語がよくわからないから、ひとりでできるかどうか不安で……」

張　「あの、私でよろしかったら、いっしょに行きましょうか↘」

高崎　「どうもありがとう。本当にお願いしていいですか」

張　「お役に立ててうれしいです。先生、いつ行きますか」

高崎　「銀行は何時まで開いていますか」

張　「5時までですから、まだ大丈夫です。今から行きましょうか↘」

高崎　「じゃ、お願いします」

第4課「依頼」の会話練習

課題1

ゆかり　「敏幸くん、数学が得意だったよね。数学の宿題があるんだけど、ちょっとわからなくて……。悪いけど教えてくれない♪」

敏幸　「今日はちょっと……。明日英語のテストがあるから、今から勉強しなきゃならないんだ」

ゆかり　「私の宿題も提出日が明日だから、どうしても今日教えてほしいんだけど……」

敏幸　「えっ、困ったな」

ゆかり　「敏幸くん、お願いします。教えてください」

敏幸　「仕方がないなあ。じゃ、昼休みに図書館で」

ゆかり　「ありがとう」

敏幸　「その代わり、ぼくの試験勉強も手伝って」

ゆかり　「わかった」

課題2

〈生徒1は傘を借りたい。生徒2は傘を持っている〉

生徒1　「すみません。急に雨が降ってきたので、傘をお借りしたいんですが」

生徒2　「いいですよ。どうぞ」

生徒1　「ありがとうございます」

〈生徒3は電話を借りたい。生徒4は電話を貸せない〉

生徒3　「あのう、すみません。ちょっと会社に連絡したいので、電話を貸していただけないでしょうか」

生徒4　「すみません。今、インターネット

をしていて電話が使えないんです」
生徒３　「そうですか。困ったなあ」
生徒４　「ごめんなさい。あとでまた来てください」
生徒３　「はい。ありがとうございます」

〈留意点〉

「電話を貸していただけないでしょうか」というのは、電話の機能を借りたい、つまり使わせてほしいということです。「貸す／借りる」には、「利用させる／利用する」の意味があります。電話のほかにも「トイレを貸してください」も同じ意味で使います。

第５課「許可」の会話練習

課題１

〈学校の食堂で、ロール B は友達。許可する場合〉

敏幸　「ゆかりさん、ここ、座ってもいいノ」
ゆかり　「もちろん」

〈学校の食堂で、ロールＢは友達。断る場合〉

昭一　「ここ、座ってもいいノ」
ゆかり　「ごめん。直美さんが来るの」
（直美さんが来るんだ）
昭一　「ああ、そう」
ゆかり　「あそこが空いているんじゃないノ」
昭一　「本当だ。ありがとう」

〈街の食堂で、ロール B は知らない人。許可する場合〉

ゆかり　「すみません。ここ、座ってもよろしいでしょうか↘」
知らない人「ええ、どうぞ」

〈街の食堂で、ロール B は知らない人。断る場合〉

ゆかり　「すみません。ここ、座ってもよろしいでしょうか↘」
知らない人「ごめんなさい。友達が来るんです」

〈街の食堂で、ロールＢは年上の人で知り合い。許可する場合〉

直美　「あ、高崎さん。こんにちは」
高崎　「こんにちは」
直美　「おひとりでお食事ですか。あの、お隣よろしいでしょうか↘」
高崎　「どうぞ、どうぞ」

〈学校の食堂で、ロール B は年上の人で知り合い。断る場合〉

敏幸　「あ、高崎さん。こんにちは」
高崎　「こんにちは」
敏幸　「学校にいらしてたんですか。」
高崎　「そうなんだよ。（そうなんですよ）ちょっと校長先生に用があって」
敏幸　「あの、お隣よろしいでしょうか↘」
高崎　「あ、山田さんがもうすぐ来るんだ。悪いね（来るんです。悪いわね）」
敏幸　「いいえ。じゃ、また。失礼します」
高崎　「ああ、じゃ、またね」

課題２

〈ロール B は高校の友達。許可する場合〉

王　「直美さん、きれいな着物ね」
直美　「ありがとう」
王　「写真撮ってもいいノ」
直美　「もちろん。きれいに撮ってねノ」

〈ロールBは初対面の高校生。許可する場合〉

王　「はじめまして。王といいます」
山口　「はじめまして、山口です」
王　「きれいな着物ですね」
山口　「ありがとうございます」
王　「写真を撮ってもいいですか」
山口　「どうぞ」

〈ロール B は初対面の年上の人。許可する場合〉

王　「はじめまして。王と申します。日本語を勉強している高校生です」
中野　「はじめまして。中野と申します。日本語、お上手ですね」
王　「ありがとうございます。中野さんのお着物、本当にきれいですね」
中野　「いえ、いえ……」
王　「もし、おさしつかえなければ写真を撮らせていただきたいんですが、よろしいでしょうか↘」
中野　「ええ、いいですよ↗　いっしょに撮ってもらいましょう」

〈ロール B は初対面の年上の人。断る場合〉

王　「はじめまして。王と申します。日本語を勉強している高校生です」
中野　「はじめまして。中野と申します。日本語、お上手ですね」
王　「ありがとうございます。中野さんのお着物、本当にきれいですね」
中野　「いえ、いえ……」
王　「もし、おさしつかえなければ写真を撮らせていただきたいんですが、よろしいでしょうか↘」
中野　「いえ、それはちょっと、ごめんなさい。恥ずかしいですから」
王　「そうですか↘　大変失礼いたしました」

課題 3

ロールA「先生、窓を開けてもいいですか」
教師　「いいですよ。暑いですか」
ロールA「はい。ちょっと暑いです」

ロールB「先生」
教師　「はい」
ロールB「李さんが気分が悪いと言ってます。保健室に連れて行ってもいいですか」
教師　「李さん、大丈夫ですか。じゃ、お願いします。さあ、授業を始めます。まず、先週の宿題を出してください」

ロールC「先生、忘れました」
教師　「宿題をするのを忘れたんですか。持って来るのを忘れたんですか」
ロールC「すみません。宿題があることを忘れていました。来週提出してもかまいませんか」
教師　「かまいませんが、この宿題は明日のテストの練習ですよ」

ロールD「先生」
教師　「あ、李さん。どうですか」
ロールD「あの、頭がとても痛くて熱も高いので、今日は早退させていただきたいんですが」
教師　「わかりました。早く帰って休んでください。薬は飲みましたか」
ロールD「はい、保健の先生にいただきました」

教師　「じゃ、気をつけて帰ってくださいね。お大事に」

ロールD「それじゃ、失礼いたします」

第6課 応用練習

課題

王　「水野さん、おはよう」

水野　「あ、王さん。おはよう」

王　「もう学校に慣れた♪」

水野　「うん。でも、まだクラスメートの名前が覚えられなくて」

王　「大丈夫。すぐ友達がたくさんできるから。じゃ、今度の日曜日、クラスの何人かを誘ってピンポンに行かない♪」

水野　「ピンポン……。ごめん。また、今度ね」

王　「忙しい♪」

水野　「ううん。ちょっと……。実は、ピンポンはあまり得意じゃないんだ」

王　「そんなこと気にしないで。よかったら、教えてあげるよ」

水野　「そう♪　ありがとう。でも、ラケットも持ってないし……」

王　「私（ぼく）、貸してあげるから大丈夫。でも、時々練習したいなら、いいラケットを買ったらどう♪」

水野　「いくらくらいするかな」

王　「安いのは10元くらい。いいのは50元以上するけど」

水野　「安いのでいいな」

王　「長く使うつもりなら、20元から30元くらいのものを買ったほうがいいんじゃない♪」

水野　「じゃ、そうする。いっしょにお店に行ってもらってもいい♪」

王　「もちろん。今度の日曜日、まずラケットを買おう。それから、体育館に行ってピンポンをしよう」

水野　「本当にできるかなあ」

王　「すぐ上手になるよ。じゃ、日曜日に」

水野　「うん。日曜日に。いろいろありがとう」

日本から客を迎える

ここでは、あなたの学校に日本から客が訪れたと想定して、どのような表現を使うかをまとめています。参考にしてください。

1…… 出迎える時のあいさつ

出迎えのあいさつは、その客に初めて会うのか、以前に会ったことがあるのかによって違います。また、実際に会うのは初めてでも、手紙や電話でやりとりしたことがある人なのか、全く初めて会う人なのかで違ってきます。このようなことは中国語にもありますが、日本語のほうが細かい区別をするようです。

(1) 全く初めて会う場合

「はじめまして」は、文字どおり「はじめて」会った時のあいさつです。どんな場合でも、どんな時でも、どんな相手でも「はじめまして」は使えます。「はじめまして」のあとに自分の名前と「よろしくお願いいたします」を付け加えるのが一般的です（例 1）（【第 1 章 第 5 課「初めて会った時」】23 頁参照）。ただし、その場にいる人に自分の名前を紹介された場合は、自分の名前を言わないで「よろしくお願いいたします」だけを付け加えることもあります（例 2）。

例 3 のように、日本から来た客が「はじめまして。お世話になります」と言う場合もあります。これに対して出迎えた人は「ようこそいらっしゃいました」とこたえればいいです。この「ようこそいらっしゃいました」という言葉は、「歓迎します」という意味なので、初対面の人だけでなく、以前に来たことがある人にも使うことができます。

●例1▶▶　楊　「はじめまして。楊と申します。よろしくお願いします」

山田　「はじめまして。よろしくお願いいたします。山田と申します」

●例2▶▶　李　「山田さん、こちらは外事辦公室〔がいじべんこうしつ〕の楊主任です」

楊　「はじめまして。よろしくお願いいたします」

山田　「はじめまして。こちらこそ、よろしくお願いいたします」

●例3▶▶　山田　「はじめまして。お世話になります」

楊　「はじめまして。ようこそいらっしゃいました」

(2) 手紙や電話で連絡したことはあるが、直接会うのは初めての場合

手紙や電話で連絡したことがある場合も、「はじめまして」を使います。「はじめまして」のあとに「お手紙をありがとうございました」「お電話をありがとうございます」といった言葉を付け加えて、手紙や電話の相手が自分だということを知らせるといいでしょう。また、「お目にかかるのを楽しみにしていました」「お目にかかれてうれしいです」「お会いできてうれしいです」など、「あなたに会えてうれしい」という意味の言葉を付け加えると親しみが増すでしょう。

●例4▶▶　山田　「はじめまして。よろしくお願いします。山田です」

李　「はじめまして、山田さん。お手紙をありがとうございました。私が李です」

●例5▶▶　山田　「はじめまして。よろしくお願いします。山田です」
李　「山田さん、何度もお電話をありがとうございました。私が李です。お目にかかるのを楽しみにしていました」

(3) 再会した場合

以前会ったことがある人に再会した時は、「お久しぶりです」「ごぶさたしていました」「ごぶさたしておりました」というあいさつをします。

「久しぶり」は「長い間、会っていなかった」という意味です。したがって「久しぶり」のあとには「お元気ですか」など相手の近況を聞く言葉が続くことが多いです。それに対して「ごぶさた」は「長い間、あなたに連絡しませんでした」という意味です。したがって「ごぶさた」のあとには、「ごめんなさい／すみません／申し訳ありません／申し訳ございません」というおわびの言葉が続くことが多いです（【第1章「久しぶりに会った時」第6課】25頁参照）。

●例6▶▶　李　「山田さん、ごぶさたしていました」
山田　「こちらこそ、ごぶさたしてすみません。お変わりありませんか」

●例7▶▶　山田　「李さん、お久しぶりです。お元気ですか」
李　「本当にお久しぶりです。山田さんもお元気でしたか」

例1～7のようなあいさつをしたあとは、「お疲れでしょう」「お荷物をお持ちしましょう」「外に車を待た

せています」など、状況に応じた表現を使うといいでしょう。

2…… 人を紹介する

(1) 校長や同僚の教師を紹介する

あいさつが終わったら、周りの人を紹介します。

人を紹介する時の方法は、中国も日本も同じです。しかし、中国人の名前に慣れていない人は、中国人の名前を聞いてもすぐに覚えられません。日本人は漢字を示されるほうが覚えやすいので、名刺を渡したり、名前を紙に書いたりするといいでしょう。

反対に、日本人の名前に慣れていない中国人は、日本人の名前を聞いただけではよくわからないことがあります。その場合は、「お名刺をいただけませんか」「お名前をここに書いていただけませんか」と言えばいいです。また、名刺をもらった時、その読み方がよくわからない場合には「失礼ですが、このお名前はなんとお読みするんですか」と聞いてかまいません。日本人の姓は種類が非常に多く、同じ字を書いても読み方が二つ以上ある姓もあるので、日本人でも相手の名前が読めないことがよくあります。

●例1▶▶

李　「山田さん。こちらが校長の張です」

山田　「張先生、はじめまして。よろしくお願いいたします」

李　「そして、こちらが日本語教研室の王です」

山田　「王先生、はじめまして。山田です。よろしくお願いいたします」

中国の学校では副校長が何人かいてそれぞれ役割が決まっていますが、日本の学校には、副校長にあたる「教頭」は1名か2名しかいません。そのため、事情を知らない日本人に一度にたくさんの副校長を紹介すると、混乱してしまいます。そこで一度に複数の副校長を紹介する時には、「経理担当の副校長の劉です」「教務担当の副校長の胡です」というように、それぞれの担当分野を説明するとわかりやすくなります。

また、日本では、自分が勤務する学校や会社、機関の関係者を紹介する時には敬称を付けません。「校長の張です」と言うのが一般的です。「張校長です」とか「校長の張先生です」というような言い方はあまりしません。しかし、教師がお互いを呼ぶ時には「○○先生」と言うのが普通です。そこで、あなたの学校を訪問した客の職業が教師である場合は、「こちらが李先生です」と紹介しても問題はないでしょう。客が教師であることがわかっている時は、客にも「さん」を付けるより「先生」を付けるほうがいいでしょう。

(2) 生徒を紹介する

日本語を勉強している生徒を紹介する時は、生徒に自己紹介させるのもいいでしょう。簡単な内容でも生徒にはいい練習になります。

●例2▶▶

李　「この2人は私のクラスの生徒です」

唐　「はじめまして。2年生の唐です。よろしくお願いします」

範　「はじめまして。同じく2年生の範です。ようこそいらしゃいました」

●例3 ▶▶

李　「それではみなさん、順番に自己紹介をしてください」

姜　「はじめまして。姜です。私は日本語を2年間勉強しています」

周　「はじめまして。周です。どうぞよろしくお願いいたします」

梁　「はじめまして。梁です」

3…… 歓迎会であいさつの通訳をする

歓迎会のあいさつを正確に通訳するのは難しいものです。もし、その歓迎会が重要なものである場合は、正確に通訳しなければならないので、あいさつをする人からあらかじめ原稿をもらって翻訳したものを読むのがいいでしょう。しかし、一般的な歓迎会の場合は、一字一句を正確に通訳する必要はないので、次のような点に気をつけて通訳すればいいでしょう。

(1) 歓迎の言葉

客が複数の場合、中国ではあいさつの最初に「尊敬する○○先生、○○先生、○○先生」と客すべての名前を挙げます。しかし、日本ではその場にいる人の名前をすべて挙げることはあまりしません。「みなさん」「先生方」と言うのが一般的です。ただし、客が一人の場合は「○○先生」と名前を挙げます。また、「尊敬する○○先生」という表現は日本語にもありますが、一般的な表現とはいえません。特に「あいさつ」の言葉としてはほとんど使いません。

●例１▶▶　「（日本の）みなさん、本日は遠いところをようこそお越しくださいました。学校を代表して歓迎のあいさつをいたします」

●例２▶▶　「（日本の）先生方、本日はようこそ本校へおいでくださいました。心より歓迎いたします」

中国語のあいさつでよく使われる表現には、日本語に直訳すると不自然な感じがするものがあります。例えば、「到来を熱烈に歓迎します」「円満に結束する」などです。これらは次のように訳すと自然な日本語になります。

①「到来を熱烈に歓迎します」
　→「ご来訪を心から歓迎いたします」
　→「ようこそお越しくださいました」
②「円満に結束する」
　→「成功のうちに終わる」
　→「順調に終わる」

(2) 中日友好の言葉

訪問に対する感謝を表したあとには、多くの場合、中日友好の言葉が続きます。「中日両国は一衣帯水の国家で、古くから交流をしてきた」「中日人民の友好が永遠に続く」などは中国のあいさつでよく使われる表現です。しかし、このような言葉を直訳すると不自然な日本語になります。「一衣帯水」や「人民」などは、日本語ではあまり使わないからです。しがたって、次のように訳すと自然な日本語になります。

●例3▶▶　「中国と日本は隣国同士で、古くから交流が盛んでした」

●例4▶▶　「中日両国の友好関係が末永く続くことを願っています」

4…… 案内する

(1) 日程の調整と説明をする

校内や周辺を案内する場合、最初に日程や時間の予定を話しておき、できれば客の希望を聞くと喜ばれます。

●例1▶▶　「これからまず、校内をご案内します。1時間ぐらいの予定ですから、お荷物はここに置いたままで結構です。そのあと校長がみなさまにごあいさつをいたします」

●例2▶▶　「はじめに校長がごあいさつをいたします。つぎに30分ほど校内をご案内します。それから近くのレストランで昼食にしたいと思いますが、いかがでしょうか↘」

●例3▶▶　「今日は、午前中は学校を見学して、昼食のあと午後1時から市内観光をしましょう。この市の名所になっている松花江とソフィア大教堂にご案内したいと思いますが、ほかにどこかご覧になりたいところがあればおっしゃってください。午後5時ごろにホテルへお送りします。このようなスケジュールでよろしいでしょうか↘」

(2) 学校の案内

学校を案内している時に学生数、クラス数、時間割などを聞かれた場合、次のようにこたえるといいでしょう。このような数字は、聞かれた時にすぐにこたえられるようあらかじめ書いておくといいでしょう。

●例4▶▶ **「この学校は、初級中学の学生が 1,000 人、高級中学の学生が 800 人います。そのうち、初級中学で 200 人、高級中学で 100 人の学生が日本語を勉強しています」**

●例5▶▶ **「ここが日本語教研室です。この学校には全部で 5 人の日本語教師がいますが、1 人は副校長なので、授業は担当していません」**

客は、学生数や授業時間数といった数字のほかに、授業の内容にも興味を持っているでしょう。内容について質問された時は、自分の授業の進め方を話すといいでしょう。また、客が教師である場合には、日本の学校について質問し、両国の教育方法の違いについて意見交換するのも有意義なことです。

●例6▶▶ **「これが 2 年生の日本語の教科書です。だいたい、この教科書の 1 課を 6 時間かけて教えています」**

●例7▶▶ **「授業の進め方は先生によって違いますが、だいたい 1 時間目には新しい単語の意味を教えて、本文を読む練習をします。2 時間目には〜」**

●例 8 ▶▶　「日本の高校では、大学受験の指導をどのようにしていますか」

●例 9 ▶▶　「大学に進学しない生徒は、すぐに就職するんですか」

(3) ホテルへ案内する

見学を終えてホテルへ案内する時には、次のように言えばいいでしょう。また、見学が2日以上にわたる場合は、一日の予定を終えたところで、翌日の予定についてもう一度確認しておきます。

●例 10 ▶▶　「ホテルまでお送りします。ここから歩いて5分ぐらいです」

●例 11 ▶▶　「車でホテルまでお送りします。どうぞ、お乗りください」

●例 12 ▶▶　「今日はお疲れでしょうから、すぐホテルにご案内します。学校の見学は明日にしましょう」

●例 13 ▶▶　「明日は9時にホテルに迎えに行きます／お迎えにまいります。私は都合で行けませんが、葉がロビー〔大厅〕でお待ちしています」

●例 14 ▶▶　「明日は10時までに学校にいらしてください。校内をご案内します」

5…… レストランで食事をする

(1) メニューを説明する

日本でも中華料理は人気が高い料理です。中国を訪問する日本人の楽しみの一つは、本場の中華料理を食べることだ、と言っても言いすぎではありません。しかし、中国の「中国菜」は日本の中華料理とはかなり違います。そこで、日本人を食事に招待した時は、「中国菜」について説明しながら食事を勧めるといいでしょう。また、その地方の有名な料理や、いつも家庭で食べている料理を食べてもらうと喜ばれるでしょう。

●例1 ▶▶ 「これは、「ツォスワンドン〔炒双冬〕」という料理です。材料はしいたけとたけのこで、この地方でよくとれる材料です」

●例2 ▶▶ 「この料理の味を決めるのは、蓮根〔莲藕〕です。この地方の蓮根はとてもおいしいことで有名なんです」

●例3 ▶▶ 「この料理は特別なものではありません。この地方の家庭でよく作る料理です。お口に合えばいいんですが……」

(2) 食事や酒を勧める

食事や酒を勧める時は、「～をどうぞ」「～はいかがですか」という表現を使います。簡単な表現ですが、どんな相手にもどんな場面でも使える表現です（【第2章第2課「勧め」】54～67頁参照）。

●例4 ▶▶ 「もう一杯／一つどうぞ」

●例5▶▶ 「もう少しいかがですか」

●例6▶▶ 「たくさん召し上がってください」

中国語の「别客气」を訳すと「遠慮しないでください」ですが、日本では、食事中では「遠慮しないでください」という表現よりも、「もう少しいかがですか」という言い方のほうがよく使われます。これは「もっと召し上がって／食べてください」という意味です。

中国の「白酒」のアルコール度数は日本の酒より2、3倍強いです。初めて「白酒」を飲む日本人は、その強さにびっくりしてしまいます。

6…… 体調を気遣う

水の違い、食べ物の違い、そして緊張感から、外国を旅行している人は体調を崩しやすいものです。体調が悪そうな時、また体調がいいかどうかを聞く時は、次のように言うといいでしょう。

●例1▶▶ 「お体の具合はいかがですか／体調はいかがですか」

●例2▶▶ 「おなかの具合はいかがですか。もし、調子が悪いようならお薬を差し上げましょうか↘」

●例3▶▶ 「山田さんはおなかの具合があまりよくないと聞きました。今日の夕食は軽いものにしましょうか↘」

7 …… 別れる時のあいさつ

別れる時のあいさつは、まず客の側から言うのが普通です。ほとんどの場合、客は「お世話になりました」「ありがとうございました」というあいさつをします。それに対しては「たいしておかまいもできなくて……」や「またいらしてください」という言葉でこたえます。

●例1▶▶

山田　「お世話になりました。中国の高校を見学できて、とても参考になりました」

李　「いいえ。たいしておかまいもできなくて……。機会があれば、ぜひまたいらしてください」

●例2▶▶

山田　「李先生、大変お世話になりました。本当にいい経験ができました」

李　「いいえ、十分なお世話もできなくて……。ぜひ、またいらしてください。今度はもっとゆっくりご案内できるといいのですが……」

最後に、客を見送る時のあいさつとして、「再見」と言っていいでしょう。もちろんこれは中国語ですが、たいていの日本人が知っている中国語です。日本語で言う場合は、「また会いましょう」「またお会いできればいいですね」のような表現を使うといいでしょう。「さようなら」を使ってもいいのですが、「さようなら」は、もう二度と会わない人に対しても使う言葉です。遠くにいてもあなたのことを忘れません、また会いたい、という気持ちを込めて「再見」というあいさつを

するのが、中国での別れの時にはふさわしいのではないでしょうか。

●例３▶▶　山田　「李先生、ありがとうございました。とても楽しかったです」
李　「いいえ、こちらこそ。またお目にかかれる日を楽しみにしています」
山田　「李先生、再见！」
李　「山田先生、再见！」

餃子は主食？

日本で最も有名な中華料理は餃子ですが、日本の餃子は中国の餃子とずいぶん違います。まず、日本では「菜」なので、多くの場合ご飯といっしょに食べます。第二に焼き餃子〔锅贴儿〕がほとんどで、水餃子〔すいぎょうざ〕を食べることは比較的少ないです。第三に、日本の家庭で餃子を作る時は機械で作った市販の餃子の皮を使うことが多いので、手作りの皮はとても珍しいです。

日本の包子も中国のものとはずいぶん違い、中国のほうがおいしいと、ほとんどの日本人が言うはずです。そこで、主食にはご飯〔米饭〕よりも、餃子や包子を出すほうが喜ばれるでしょう。

中華料理は日本料理より油を多く使います。そのため、中国の料理に慣れていない日本人が中華料理を食べると、まだあまり食べていないのにおなかがいっぱいになってしまうことがあります。逆に中国人が日本に来ると、日本のあっさりした料理に物足りなさを感じることがよくあります。

また、日本の習慣では出された食事は残さず食べるのが礼儀なので、おなかがいっぱいでも無理して食べることがあります。このような習慣にも配慮して料理を出すといいでしょう。

例１「これは『三鮮餃子』です。中国では、餃子は主食です。たくさん召し上がってください」
例２「中国にも焼き餃子があります。ほかに蒸し餃子もありますが、ほとんどは水餃子を食べます。中国で単に『餃子』と言えば、水餃子のことです」
例３「どうぞ、今日はゆっくり召し上がってください」
例４「どうぞ、少しずつでいいですから、ぜひ全種類食べてください」

このシリーズの制作にあたって、以下の団体や企業からご協力いただきました。この場を借りて、心より感謝申し上げます。

■助成

（株）講談社（国際交流基金特定助成）

（社）東京倶楽部

■協賛

キングレコード株式会社 / 日本皇声唱片股份公司

漢語話者のためのわかりやすい日本語シリーズ②

コミュニケーション表現

2002 年 7 月発行

発行人　田所宏之

発行所　（財）国際文化フォーラム/ The Japan Forum

〒 163-0726

日本国東京都新宿区西新宿 2-7-1 新宿第一生命ビル 26 階

電話（81）3-5322-5211　FAX（81）3-5322-5215

E-mail : forum@tjf.or.jp　http : //www.tjf.or.jp

表紙デザイン・基本フォーマット　向井裕一

組版　（有）新疆

イラスト　浅山友貴

校正　佐田一郎

© 2002 by The Japan Forum,　Printed in China

本書の無断転載、複製は固くお断りします。

漢語話者のための
わかりやすい日本語シリーズ❷

コミュニケーション表現

財団法人国際文化フォーラム